

630

630-1



1200501540537

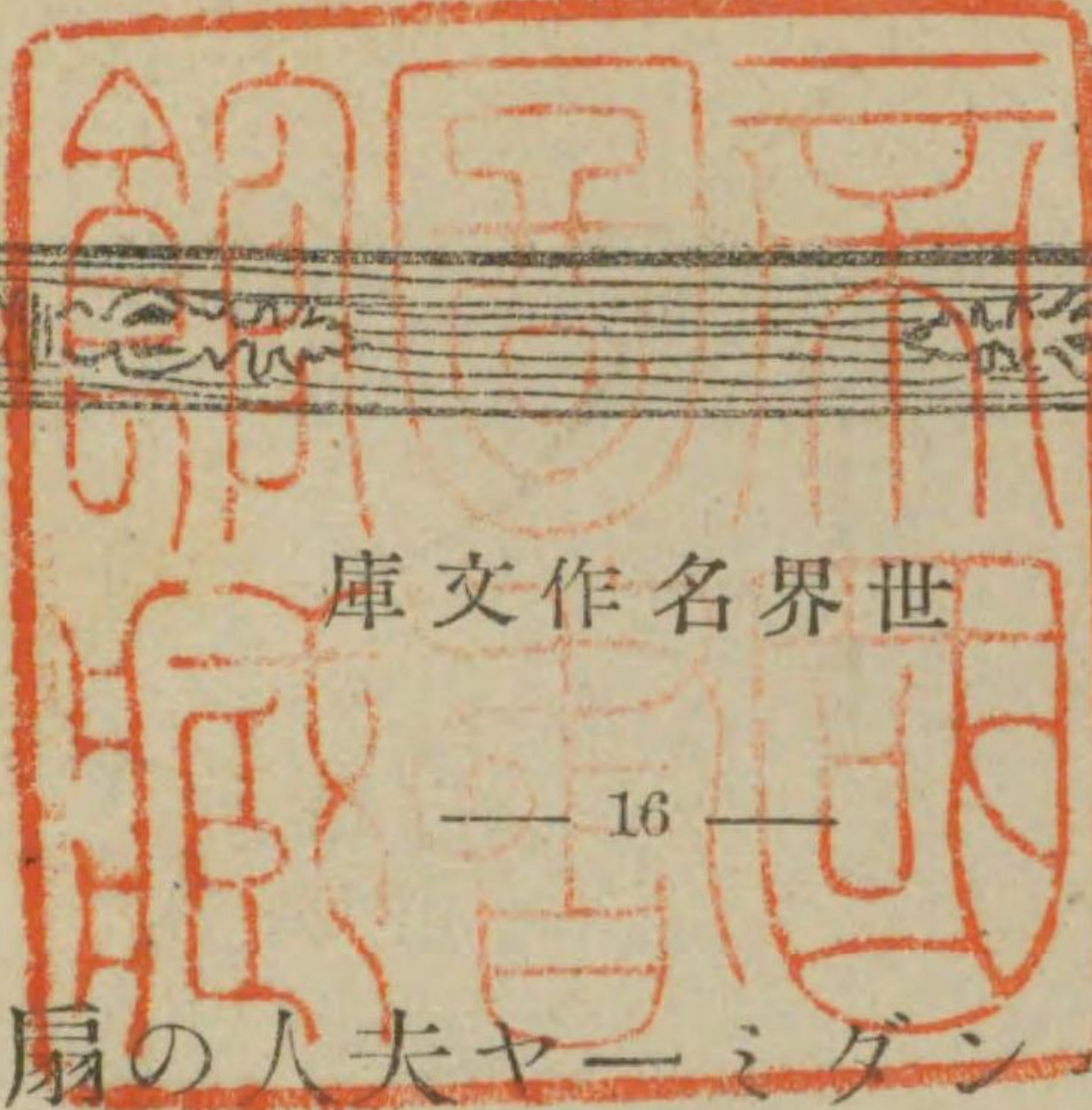
扇の夫人ヤミダンキウ

作 ドルイワ

譯郎一潤崎谷

版堂陽春





世界名作文庫

— 16 —

ウキダシヤキヤクノ扇

ワ イ ル ド

谷崎潤一郎 譯

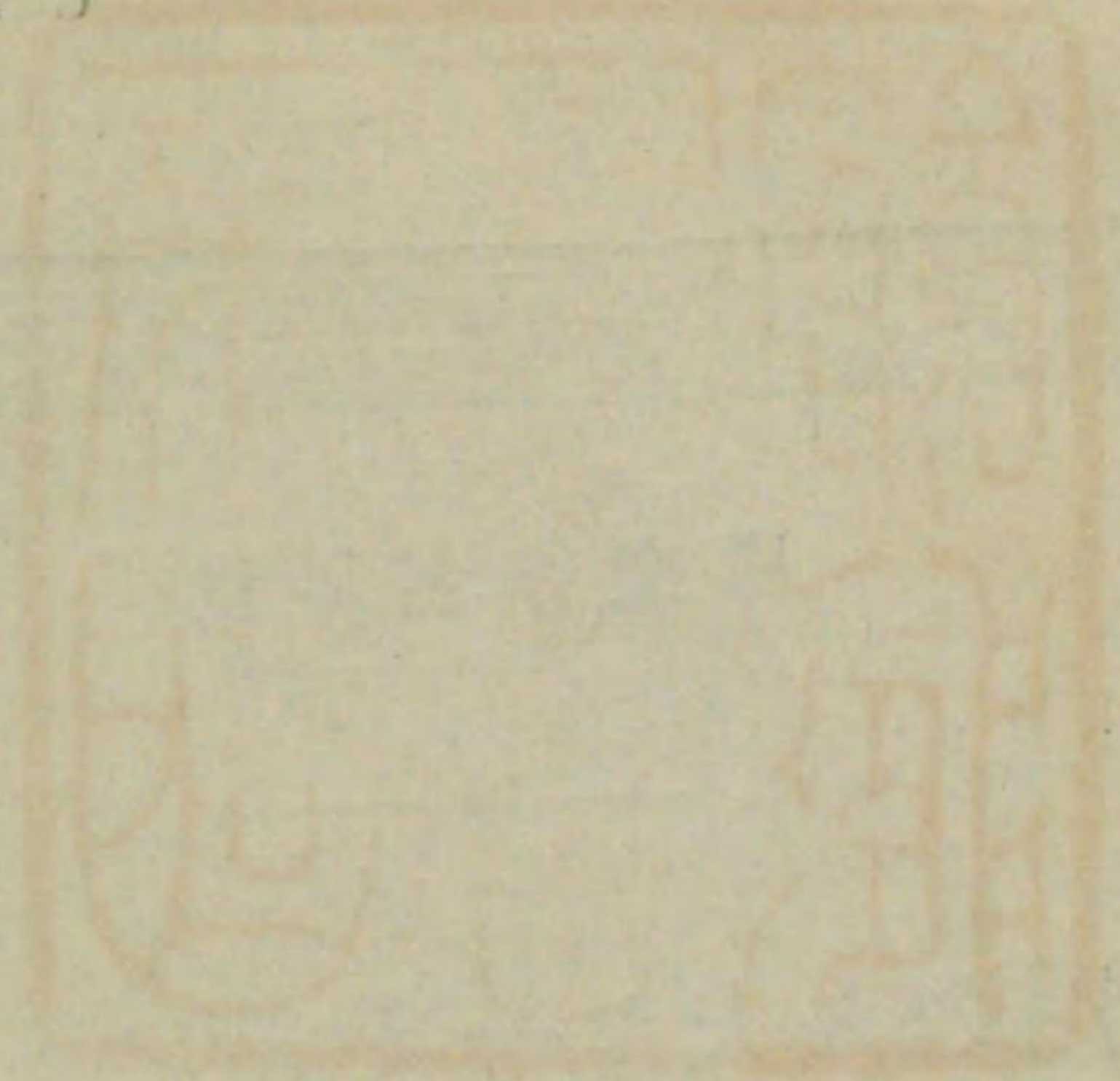
春陽堂



630-1

ウキンドアミヤ夫人の扇

1 223



場

第一幕 ウキンドグミーヤ卿邸のモーニング・ルーム。

第二幕 ウキンドグミーヤ卿邸の應接室。

第三幕 ダーリントン卿邸の一室。

第四幕 ウキンドグミーヤ卿邸のモーニング・ルーム。

人

ウキンドグミーヤ卿

ダーリントン卿

アウガスタス・ロートン卿

セシル・グレーム

ダンゼイ

ホパー

パーカー 召使長

ウキンドグミーヤ夫人

バアリック公爵夫人

アガーサ・カーリスル嬢

プリムデール夫人

スタットフィールド夫人

ジェッドバラ夫人

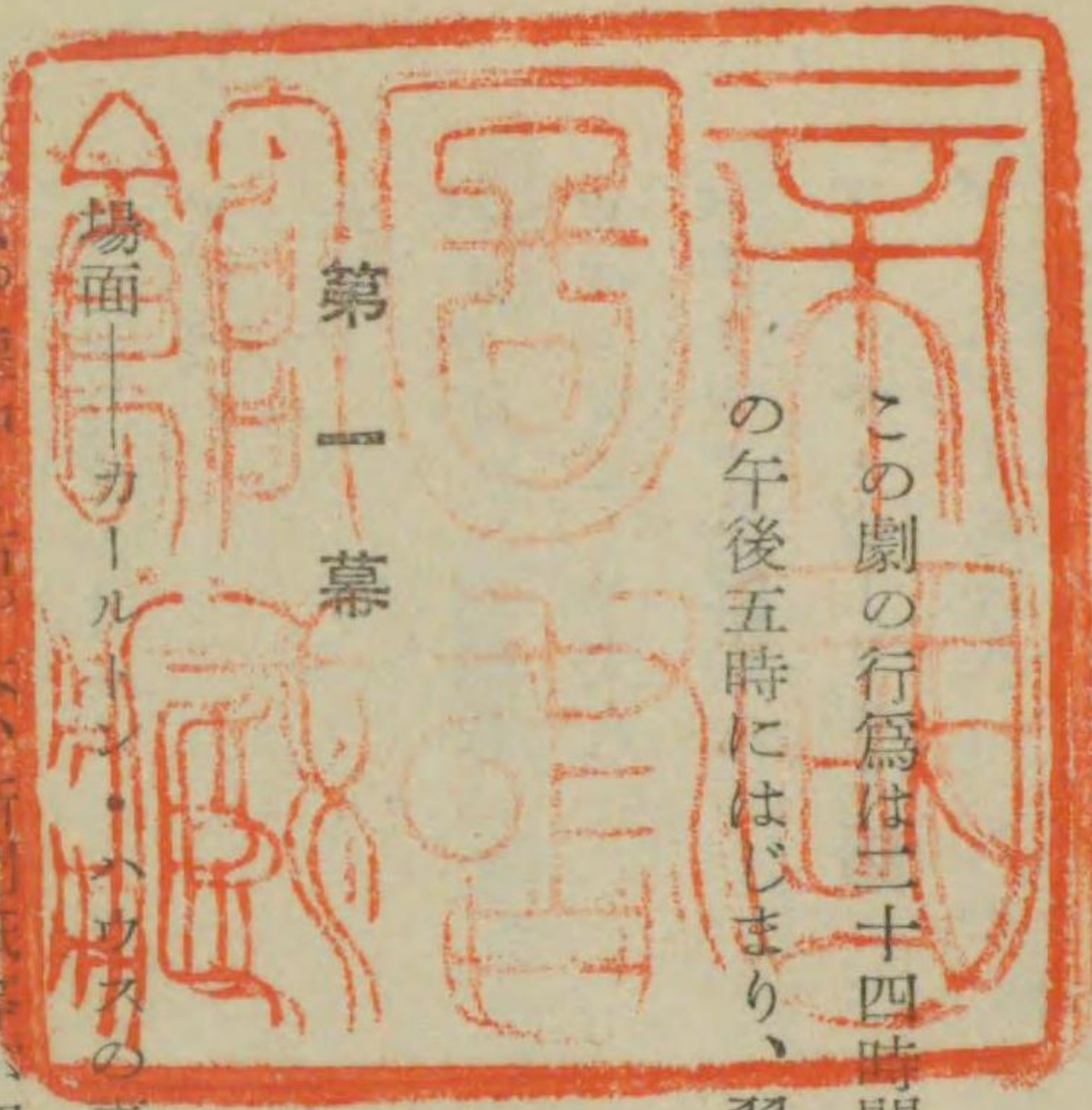
クーパー・クーパー夫人

アーリン夫人

ローザリーイ 召使

時 現代
場所 ロンドン。

この劇の行爲は二十四時間以内になる。すなはち或る火曜日の午後五時にはじまり、翌日の午後一時三十分に終る。



第一幕

場面 一カーリング・ハウスの臺地に建てられたウキンダミーヤ住宅のモーニングルーム。扉中と右。本、新聞紙等が置かれた机右。ティーテーブル付きのソファ左。見晴し左に向つて開かれる窓左。テーブル右。

(ウキンダミーヤ夫人はテーブル右に倚り、薔薇の花を青い瓶に生けてゐる)

(パーカー登場)

パーカー 奥様は今日お客様にお逢ひなさりませうか。

ウキンダミーヤ夫人 ああ——誰方かおいでになつたの？

パーカー ダーリントン卿がおいでになりました。

ウキンダミーヤ夫人 (一寸考へて)お通し申しておくれ。——今日は誰方にもお目にかかるから。

パーカー はい畏まりました。

(パーカー退場、中に)

ウキンダミーヤ夫人 晩にならないうちにお目にかかりたいと思つてゐたら、来て下さつてほんたうにいい挨拶だつた。

(パーカー扉中に登場)

パーカー ダーリントン閣下。

(ダーリントン扉中より登場)

(パーカー退場)

ダーリントン卿 奥さん御機嫌よろしうございます。

ウキンダミーヤ夫人 御機嫌よろしうございます。ダーリントンさん。あ、握手するわけにはまゐりませんの、薔薇の露で両手がすっかり濡れて居りますから。綺麗でございませう。今朝程、セルビーから届いたのでございますよ。

ダーリントン卿 成程見事ですな。(卓上の扇を見て)さうして、これはまあ大層結構な扇ですな。一寸拜見さして戴けませんか。

ウキンドミヤ夫人 さあどうぞ、ほんたうに綺麗でございます。それにはわたくしの名前が書いてありまして、大事な物でございます。わたくしもたつた今見たばかりなのでございますが、夫が誕生日のお祝ひに贈つてくれました。今日はわたくしの誕生日なのでございますよ。

ダーリントン卿 え、さやうでございますか。

ウキンドミヤ夫人 ええ、今日わたくしは一人前の女になつたのです。わたくしの生涯で一番大切な日なのでございます。さうぢやございませんこと？ 今夜の宴會はそのためなのでございますよ。まあ、どうぞおかけなすつて下さいまし。(また薔薇を揃へてゐる)

ダーリントン卿 (腰掛けながら)今日があなたのお誕生日なのでございますか。さうと知つたらお宅の前の往來に美しい花を敷きつめて、その上をあなたがお歩きになるやうに致しましたのに、惜しい事でございます。一體、花と云ふものはあなたのために作られてゐるのです。

(間)

ウキンドミヤ夫人 ダーリントンさん、あなたは昨晚外務省でわたくしを随分おなぶりなさいましたのね。またおなぶりなさるのぢやございませんか。

6 ダーリントン卿 私が？ 奥さん。

(パーカーと従僕とが、盆と茶道具とを持つて中に登場)

ウキンドミヤ夫人 パーカー、其處へ置いておくれ、それでいいよ。(ハンケチで濡手を拭き、左の位置のチーテーブルに行つて坐る)こちらへいらつしやいませんか、ダーリントンさん。

(パーカー扉中より退場)

ダーリントン卿 (椅子をとつて左中へ行く)奥さん、さうおつしやられると困りますな、私がどんなことを致しましたでせう？ (テーブル左に向つて坐る)

ウキンドミヤ夫人 だつて、あなたは昨夜一と晩中、わたくしにいろんなお世辭をおつしやつたぢやございませんか。

ダーリントン卿 (微笑しながら)いや、今時の男子は皆手許が不如意でございます。出すものと言つたらお世辭よりほかございませんよ。ほんたうに出せるものはお世辭よりほかないんですからね。ウキンドミヤ夫人 (首を振りながら)いいえ、わたくしは眞面目なお話をしてゐるのでございますよ。ほんたうに眞面目なのですから、お笑ひになつてはいけません。わたくしはお世辭を言はれるのが嫌ひなのでございます。それに、男の方が心にもない出まかせを言つて、女を大變嬉しがらせたと思つていらつしやるのが、わたくしには一向わかりませんわ。

ダーリントン卿 いや、ところが私はほんたうの事を云つてゐたのです。(夫人のすすめる茶を受取る)ウキンドミヤ夫人 (嚴かに)ダーリントンさん、わたくしはさう思つて居ります、わたくしはあなた

と口論などを致したくはございません。わたくしはあなたが大好きなのでございますもの。其の事はあなたも御承知でもいらつしやいませう。けれどももしあなたが世間並の男のやうでしたら、あなたをわたくしが好きになる筈は決してございません。確にあなたは普通の人間よりずつと優れていらつしやいます。さうして時々、あなたはわざと悪人がつてお見せなさるやうに思はれますわ。

ダーリントン卿 私達は誰でも、いくらか虚榮と云ふものを待つてゐますからね、奥さん。
ウキンドミヤ夫人 まあ！ ですがあなたはどうして特にそんなことをみえになさるんでございますの？（未だテーブルに向つて坐つたまま）

ダーリントン卿（左中に坐つたまま）いや、此の頃はね、自惚の強い連中が大概みんな善人らしい顔つきをして、交際社會を勝手に泳ぎ廻つて居りますよ。だから私の考へでは悪人らしく見せかけた方が、却つて奥床しく謙遜な態度になるだらうと思ふのです。然しここにかう言ふことがあります。もしあなたが善人らしく見せかけると、世間はあなたを頗る眞面目に受取つてくれますが、悪人らしく見せかけると世間は眞面目に受取つてくれない。これが樂天主義の愚な處です。

ウキンドミヤ夫人 さうしますとあなたは、世間から眞面目にとられないでもよろしいのでございませうか。ダーリントンさん。

ダーリントン卿 いや、世間などは構ひません。世間が眞面目にとる人間と云ふと、どんな人間でせうかな？ 先づ上は僧正から、下ははた迷惑な厄介者に至るまで、ありとあらゆるくだらない人間がみ

んな其のお仲間なんです。私はただあなたにさへ眞面目にとつていただければ結構なのです。世間の誰よりもあなたに眞面目にとつて戴きたいのです。

ウキンドミヤ夫人 何故でございませう、何故わたくしに限つて、眞面目にとられたいとおつしやいますの？

ダーリントン卿（一寸躊躇して）何故と申しますとね、私達は親しい友達になるだらうと思ひますから。親しい友達にならうぢやございせんか。あなたは何時かきつとお友達を欲しくなるだらうとおもひます。

ウキンドミヤ夫人 どうしてそんなことをおつしやいますの？

ダーリントン卿 いや——私達は時々友達と言ふものが欲しくなるのです。

ウキンドミヤ夫人 だつてわたくし達はもうとうから仲の好いお友達だと存じますわ。ね、ダーリントンさん。わたくし達は何時迄もお友達でゐられますわ。あなたさへ何しなれば、——

ダーリントン卿 何しないつてどんな事でせう？

ウキンドミヤ夫人 つまり馬鹿げたことをたんとおつしやつて、友情を穢すやうなことをなさらなければ。あなたはわたくしをピウリタンだと思つていらつしやいますのね。わたくしにはいくらかピウリタンらしい處がございますの。そのやうに育てられてまゐつたのでございます。今でもそれを喜んで居りますの。わたくしは子供の時分に母に亡くなられましたので、御存じの通り父方の叔母に

當るジュリア夫人と長い間一緒に暮して居りましたが、その叔母は非常に厳格な人でございました。世間の人はもう忘れかけたこととございますが、正と不正との區別を叔母ははつきりと教へてくれました。その點について叔母は少しも容赦しない人でした。わたくしにしても勿論でございます。

ダーリントン卿 奥さん！

ウキンドミーヤ夫人 (ソファに寄りながら) あなたはわたくしを時代後れの人間だと思つていらつしやいますのね。——ええ、どうせさうでございます。わたくしはこのやうな時代と、同じ高さに立つてゐたくはございませんわ。

ダーリントン卿 あなたは今の時代を大變よくないと考へていらつしやいますか。

ウキンドミーヤ夫人 はい、今の人達は人生を一種の投機のやうに考へてゐるやうでございますわ。けれども人生は投機ではございませんわ。人生は一つのサクラメントでございます。人生の理想は愛でございます。その人生を清らかにするのは犠牲でございます。

ダーリントン卿 (微笑しながら) 凡そ世の中に犠牲にされるくらゐ、くだらないものはありませんな！

ウキンドミーヤ夫人 (前にかがみながら) そんなことをおつしやるものではございません。

ダーリントン卿 いいえ、私はさう申します。私はさう感じて居ります、私はそれを知つて居ります。

(パーカー中に登場)

パーカー 奥さま、今晚は見晴しへ毛氈を敷くのでございませうか。どういたしませう。

ウキンドミーヤ夫人 雨は大丈夫でございますか？ ダーリントンさん。

ダーリントン卿 あなたの誕生日に雨を降らせたくはありませんな。

ウキンドミーヤ夫人 パーカー、では、早速さうするやうに、みんなに言ひつけておくれ。

(パーカー扉中より退場)

ダーリントン卿 (坐つたまま) そこであなたはどうか考へになりますか？——勿論これは私の空想から出た一例にすぎないのですが——もし假に、結婚してから二年ばかりになるある若い夫婦があつて、その夫がふとしたことから或る外の女と親しい間柄になるとします——のみならずその女と言ふのが、人格が疑はしいばかりでなく、いろいろ面白くない噂のある女だとします——その女を繁々と訪ねたり、一緒に食事をしたり、時にはまた支拂までもしてやるといふやうな場合にですな、——その細君は何等か慰藉の道を求むべきものでせうか、あなたはどうか考へですか。

ウキンドミーヤ夫人 (顔をしかめる) 慰藉を求めるのでございますか？

ダーリントン卿 さうです、求めるのが當り前です——その細君にはそれだけの権利があると私は思ひます。

ウキンドミーヤ夫人 夫が陋劣だからと言つて——その妻までも、陋劣にならなければいけないでせうか。

ダーリントン卿 陋劣といふ言葉は怖ろしい言葉です、奥さん。

ウキンドミヤ夫人 怖ろしいことでございますとも。ダーリントンさん。

ダーリントン卿 あなたも御存じてございませうが、一體善人と云ふものはこの世の中に随分害毒を流すものでございますよ。さうして彼等はその悪事を世の中に大變必要なものにしてしまひます。それがまた彼等のかす最大の害毒です。人間を善人と悪人とに別けるのは甚だ可笑しな話です。人間は逢つて見て面白い人と、面白くない人とに別れるだけです。私は面白い方の人間です。さうして奥さん、どうあつても、奥さんもやつぱりその方の組におはひりなざるんです。

ウキンドミヤ夫人 あ、さう、さう。(立ち上つて、ダーリントン卿の前の右を通り過ぎながら) ダーリントンさん、あなたは其處にいらつしやいまし、わたくしはいま、ちよつと花を片づけてしまひますから。(テーブル右中に行く)

ダーリントン卿 (立ち上つて椅子を動かしながら) それからまた私の考へを申しますと、あなたは大層近代生活を非難していらつしやるやうに思はれますが、勿論大いに非難すべきことがあるのは私も認めて居ります。例へば、今日の多くの婦人は、みんな金で雇はれてゐるといふやうな事をです。ウキンドミヤ夫人 そんな人達のことはお話しなさらないで下さい。

ダーリントン卿 では、金で雇はれてゐるやうな人達の話は、止めに致しませう。無論怖ろしい人間なので、そこであなは世間が認めて、不都合だとすることを犯した婦人は、永久に許すことが

出来ないといふたうにお考へなさいませうか。

ウキンドミヤ夫人 (テーブルに向つて立ちながら) それは許すことが出来ないと思ひます。

ダーリントン卿 それでは男子はどうでせう。婦人に對するやうに、男子に對しても同じ法律がなければならぬとお考へですか。

ウキンドミヤ夫人 ええ、さうでございますとも!

ダーリントン卿 私の考へでは人生といふものはさう言ふ嚴格な、固定的な堅苦しい規則で定められるやうな、簡単なものではないと思ひます。

ウキンドミヤ夫人 もし世の中にさういふ嚴格な、固定的な規則がありさへすれば、人生といふものはもつと、もつと、簡単になるだらうと思ひますわ。

ダーリントン卿 あなたはその規則に例外をお認めにはならないでせうか。

ウキンドミヤ夫人 少しも認めませんわ。

ダーリントン卿 まあ、奥さん。あなたは何かといふ可愛らしいピュリタンでいらつしやるのでせう。

ウキンドミヤ夫人 可愛らしいは餘計でございますわ。ダーリントンさん。

ダーリントン卿 でも、さう言はずにはゐられませんでした。私は誘惑だけには打克つことが出来ないのです。

ウキンドミヤ夫人 あなたはわざと弱々しい風をして、近代人がつていらつしやいますのね。

ダーリントン卿 (夫人を見ながら) 奥さん、唯弱々しく見せかけただけの事だったのです。

(パーカー中より登場)

パーカー バアリック公爵夫人と、アガーサ・カアリスル嬢がおいででございます。

(バアリック公爵夫人と、アガーサ・カアリスル嬢中に登場)

(パーカー退場)

バアリック公爵夫人 (中に進み來つて握手しがら) マアガレットさん、お目にかかれて嬉しうございますこと。あなたはアガーサを覚えていらつしやいますこと？ (左、中を横ぎつて) ダーリントンさん、御機嫌よろしうございます。あなたには娘をお近づきにさせたくはございません。あなたはずるぶん悪い方でいらつしやいますからね。

ダーリントン卿 さうおつしやらないで下さいまし、奥さん。悪い人間としては私は全く出來損ひです。何故かと申しますと、世間の評判では、私はこれまでどの方面にも、間違つたことはしない人間ださうでございます。勿論それは人が陰口に申すのですがね。

バアリック公爵夫人 アガーサや、お前はあの方が怖くはないかい。この方がダーリントン卿とおつしやるのですよ。この方のおつしやることなどを一言でもほんたうにしてはいけませんよ。(ダーリントン卿右、中を横ぎる) いいえ、ありがたう、お茶はもう澤山でございます。(ソファに行つて坐る) わたくし達は只今マークビー夫人のお宅で、お茶をいただいたばかりなのです。相變らずひどいお茶で

したの。とてもいただけませんでした。でもその筈でございますよ。奥さんのお婿さんから下さるんださうですから。アガーサはねえ、今夜、お宅の舞踏會を大變樂しみにいたして居りますのよ、マアガレットさん。

ウキンドミーヤ夫人 (左中に坐つてゐる) あら、舞踏會ではございませんの。ほんのわたくしの誕生日のお祝に、ダンスをやるだけなのでございますわ。それも極く小人數で、早終ひにいたしますの。

ダーリントン卿 (左、中に立ちながら) 極く小人數な、極く早終ひな、さうして極く選り抜きな會でせうね。奥さん。

バアリック公爵夫人 (ソファ左に腰かけて) 無論さうでございますとも、マアガレットさん、わたくし共はお宅のことをよく承知して居りますわ。ロンドン中でアガーサを連れて來ても、夫がまゐりまして心配のない所は、まあ、お宅ぐらゐるものでございますよ。社交會はお終ひにはどんなことになるんでございませうかしら。いろいろな質のよくない人が、誰方の會へもやつて來るんですもの。そんな人達がわたくしの宴會にもやつてまゐりますわ。——もしその人達を招待しなからうものなら、それは大變でございます。ほんたうにそんな人達は何とかした方がよろございます。

ウキンドミーヤ夫人 わたくしもさう思つて居りますわ。評判の悪い人なんぞ決して寄せつけはいたしません。

ダーリントン卿 (右、中) まあ、そんなにおつしやるな。奥さん、さうしたら私などは此の邊にはる

られなくなつてしまひます！（腰かけながら）

バアリツク公爵夫人　いいえ、男の方のことではございません。でも女は男の方とは違ひますからね。わたくし達は善い人間でございます。少くともわたくし達の或る者は善い人間なのでございます。だのにわたくし達はひどく隅つこの方へ押し込められてゐるのですわ。わたくし達の夫は、時々たしなめてやらないとわたくし達の存在までも忘れてしまふでせう。だから時々たしなめてやつて、わたくし達にそれだけの権利があることを知らせてやつた方がよろございますわ。

ダーリントン卿　それが結婚といふゲームの變つた處なんですか——奥さん、もつともこのゲームも追追時代遅れになつて來ました。——兎に角細君は何時もいい札ふたを持つてゐながら、きつと終ひの札を打ち損ふのですよ。

バアリツク公爵夫人　お終ひの札と申しますと、それは夫のことなのでございますか。ダーリントンさん。

ダーリントン卿　今時の夫に對してはいい仇名ですな。

バアリツク公爵夫人　ダーリントンさん、あなたは随分墮落したお方ね。

ウキンドグミーヤ夫人　ダーリントンさんはくだらないお方よ。

ダーリントン卿　まあ、奥さん、さうおつしやつてはいけません。

16　ウキンドグミーヤ夫人　では、どうしてあなたは人生について、くだらないことばかりおつしやいます

の。

ダーリントン卿　私の考へでは人生といふものは非常に重大過ぎるもので、とても眞面目にその話をする事が出来ないのです。（中へ進み出る）

バアリツク公爵夫人　どういふ意味なのでございますの。ダーリントンさん、わたくしは頭が悪うございますから、どうぞあなたのおつしやつたことを説明なすつて下さいまし。

ダーリントン卿　（テーブルの後に來て）説明はしない方がよろございます。わかりやすく話をするのは心を見抜かれることになります。さやうなら。（公爵夫人と握手をする）それから（舞臺の前面へ出て）ウキンドグミーヤの奥さん、さやうなら。今夜伺つてもよろしうございますか。どうか伺はせていただきたいものです。

ウキンドグミーヤ夫人　（ダーリントン卿と舞臺の前面に立ちながら）ええ、是非おいで下さい。ですがあなた、あまり馬鹿らしい御常談をおつしやるのはおやめなさいましよ。

ダーリントン卿　（微笑しながら）ははあ、あなたは私を作りかへようとしていらつしやいますね。人間を作りかへるのは危険なことですよ。奥さん。（挨拶をして中より退場）

バアリツク公爵夫人　（立ち上り中に行く）何といふ面白い、憎らしい方でございます。わたくしはほんたうにあの方が氣に入りましたわ。だからあの方がお歸りになつてよかつたと思ひます。まああなたはお綺麗でいらつしやいますこと。その上衣は何處でお求めになりましたの？　あなたにお氣の

毒な事がございますのよ。マアガレットさん。(ソファに行つてウキンダミーヤ夫人と一緒に坐る)

アガーサ はいお母さん。(立ち上る)

バアリツク公爵夫人 お前彼處にある寫眞帖を拜見したらどうだね。

アガーサ はいお母さん。(左に進んでテーブルのそばに行く)

バアリツク公爵夫人 まあ、あれは大變スキツルの寫眞が好きでございますの。純潔な好い趣味ではございませんか。それはさうとわたくしはほんたうにあなたをお氣の毒だと思つて居りますのよ。マアガレットさん。

ウキンダミーヤ夫人 (微笑しながら) 何故でございますの？ 奥さん。

バアリツク公爵夫人 あの怖ろしい女のお蔭であなたはお氣の毒なことになつていらつしやるのです。

あの女は立派な服装をして居りますが、それが一層悪いことなのでございます。怖ろしい手本になるのでございますから。兄のウガスタスがあなた、ほらあの評判の悪い、やくざ者のウガスタスがすつかりあの女に陥り込んで居りますの。ウガスタスのやうな人間があると云ふことは、わたくし達女の身にとつては一つの呵責でございますわ。何と云ふ浅ましいお話でせう。あの女はとても社會には出られない女なのでございますから。大概の女は過去を持つてゐるものですが、あの女には少くとも一ダースの過去がございます。さうしてそれがみんなあの女に相當した過去でございますの。

ウキンダミーヤ夫人 奥さん、あなたは一體誰のお話をしていらつしやいますの？

バアリツク公爵夫人 アーリン夫人のことなのですよ。

ウキンダミーヤ夫人 アーリン夫人？ そんな方のことはちつとも存じませんが、奥さん、わたくしにどんな關係があるのでございませう。

バアリツク公爵夫人 アガーサや、アガーサや。

アガーサ嬢 はいお母さん。

バアリツク公爵夫人 表へ行つて夕方の景色でも見たらどうだね。

アガーサ嬢 はい、お母さん。(窓左から出て行く)

バアリツク公爵夫人 あの娘は夕方の景色が大層好きでございますの。ほんたうに優しい心持ちぢやございませんか。世の中には自然にまさるものはございませんわ。

ウキンダミーヤ夫人 ですが今のお話は何でございますの？ 奥さん。あなたはどういふわけであの人のことをわたくしにお話しなさいませう？

バアリツク公爵夫人 ほんたうにあなたは御存じないのですか。わたくし達はみんなその事で困つてゐるのでございますのよ。昨夜もファンセン夫人のお宅で、随分な事だつてみんなが話して居りましたの。人もあらうにウキンダミーヤさんは何故あんなことをなさるのだらうと、申して居りましたの。ウキンダミーヤ夫人 わたくしの夫が——さういふ種類の女とどう云ふことをしてゐるのでございませ

バアリック公爵夫人　まあ、なんと申したらいいでせう。それが肝腎なことですの。あの人はね、繁々とあの女を訪ねて、どうかすると何時間も一緒にゐて、その間は誰が來ても留守を使つて居りますの。もつとも女の方なんかあの女をめつたに訪ねはいたしません。評判のよくない男を澤山お友達にしてゐるのでございますよ。——とりわけわたくしの兄は親しくして居りますの。ですからウキンダミーヤさんのやうな方が、さう言ふ所へ出入りするのが尙更悪く見えるのですわ。わたくしはウキンダミーヤさんを模範的の夫だと思つて居りましたが、今の話はほんたうらうらうございますの。わたくしの姪達——あのサビーユの女を御存じてせうね——あの質素な、怖ろしく質素な、引つ込み思案な人間を御存じてせうね——何時も窓の所で編物をしてゐる、貧乏人のために面倒な仕事をやつてゐる女たちでございます。こんな時節柄にはそれは大層いい事だとわたくしは思ひますわ。ところがあなた、今の女がカーゾン街へ家を持つたのでございます。ちやうど其の姪達の住居の眞向うへね。あの上品な街へ。わたくし達はどうなることやらわかりませんわ。姪達が申して居りました。何でもウキンダミーヤさんは一週間に四五度も其處へ行くのですつて。現にちやんとそれを見たのですつて。あの姪達は見ないわけには行かなかつたさうです。勿論悪口などを決して申すやうな者ではないのですけれど、そのことを皆さんにお話して居りますのよ。中でも一番悪いことは、その女がある男から大變お金を捲き上げたといふ噂がございます。何でもその女は半年ばかり前に、これと云ふものも持

たずにロンドンへ來たといふ話ですのに、今ではメイフェアに立派な家を構へるやら、毎日午後になると公園を馬車で乗り廻すやら、他にもいろいろなのがござりますの。さうしてそれがみんなウキンダミーヤさんを知つてからのことなのです。

ウキンダミーヤ夫人　まあ、わたくしには信じられせんわ。

バアリック公爵夫人　けれどもまつたくほんたうのことなのですわ。ロンドン中に知らないものはないくらゐですの。それでわたくしはかうやつてあなたの所へお話にまゐりましたのです。あなたは早速ウキンダミーヤさんを、ハンブルグかエックスへ連れていらつしやつた方がいいと存じますわ。あそこへ行けばウキンダミーヤさんは外に氣が紛れるでせうし、あなたも始終あの人の番をしてゐることが出来ますわ。わたくし達はじめて結婚した時分には、時々病氣の眞似をして温泉へ出掛けて行つては、仕方なしにまづい鑛泉を飲んだものですわ。ただバアリックを田舎へ連れ出したいばかりにね。夫はいたつて誘惑されやすい性質でしたの。さうは申しますけれども、夫は無暗に人に大金をやるやうな眞似はいたしませんでした。夫は見識が高い人ですから、そんなことはいたしませんでした。

ウキンダミーヤ夫人　（言葉を遮りながら）奥さん！

奥さん、そんなことがある譯はございませんわ！（立つて舞臺を横ぎり中へ行く）わたくし共は結婚してからやつと二年にしきやならないのですもの。子供が生れてからやつと半年にしきやならないのですもの。（テーブル左の椅子右に坐る）

パアリック公爵夫人 まあ、嘸お可愛らしいでせうね。どんな赤ちゃんてございませう。坊ちゃんなの？ それともお嬢ちゃんなの？ 女のお子さんだと好いけれど、あ、さう、さう、男のお子さんてしたわね。お氣の毒でございませぬね。男の子は困りものですわ。——わたくしの倅などはもうそれはいけないんですの。每晚遅くなりましてね、とてもお話にはなりませんわ。それがあなたたつた二三箇月前にオックスフォードを出たばかりなのです。——何を教はつて來たのだから判つたものぢやございませぬわ。

ウギンダミーヤ夫人 男つて皆悪いものでせうか？

パアリック公爵夫人 え、みんな悪い人ばかりです。一人だつて悪くない者はありませんわ。さうして決してよくなりつこはありませんの。男といふものは年はとつてもよくなることはありませんわ。

ウギンダミーヤ夫人 ウギンダミーヤとわたくしとは互に思ひ合つて結婚したのです。

パアリック公爵夫人 そりやわたくし達だつて初めはさうなのでございませぬわ。パアリックが、自殺する、自殺する、と言つては恐ろしく驚かしたものですから、ついその爲に云ふ事を聞いてしまひましたの。それが一年も経ない間に、いろいろな女を漁り始めたのです。それ處か新婚旅行も濟まない中に、あの人が一寸小ざれいなわたくしの下女に妙な目付きをしてゐるのをみつけましたの。わたくしは早速その下女に暇を出してやつて、——あ、さう、さう、わたくしの妹の處へ廻してやりました。あのジョージさんは近眼だから大丈夫だと思つてゐましたが、矢張りさううまうまは行きませんでした。

わ。やつぱり彼處でもとんでもない間違ひがあつたやうでした。(立ち上る)さあ、もうこれで失禮いたしませう。わたくし達はよそで晚餐をする筈になつてゐますから。まあ、ウギンダミーヤさんのちよつとした間違ひなど、あまり氣になさらない方がようございませぬよ。早々何處かへ連れ出しておしまひなさいな。さうすればきつと、あなたの處へ歸つて來ますわ。

ウギンダミーヤ夫人 わたくしの處へ歸つて來ますつて？(中の位置)

パアリック公爵夫人 (左、中)さうですよ。あの悪い女達に連れ出されても、結局夫はわたくし達の處へ歸つて來ます。勿論いくら疵はつきましますけれど。ですから、まあ、芝居染みた喧嘩をなさるはお止めなさいまし。男といふ者はそんなことは大嫌ひなのですから。

ウギンダミーヤ夫人 奥さん、御親切にいろいろお話し下すつて有り難うございませぬ。然し夫がわたくしをだましてゐるとは信じられませんわ。

パアリック公爵夫人 まあ、あなた！ わたくしも一時はさう思つたこともございませぬが、今では男と云ふ者はみんな悪魔だと思つて居りますの。(ウギンダミーヤ夫人鈴を鳴らす)さう言ふ不所存な者を扱ふのにはうまい物を食べさせるのに限りますよ。上手なコックと云ふものは不思議な藝當をするものですよ。さうしてお宅には好いコックがおありでせう。ねえ、マーガレットさん、あなたお泣きになるの。

ウギンダミーヤ夫人 奥さん御心配には及びませぬ。決して泣きはいたしませぬ。

バアリック公爵夫人 本當に泣いてはいけませんよ。泣くと云ふ事は醜い女のためには逃げ場所で、美しい女のためには破産ですわ。アガーサヤ。

アガーサ嬢 (左に入り來つて) はい、お母さま。(テーブル左、中の背後に立つ)

バアリック公爵夫人 こちらへ來て奥さんにお暇乞ひをするんですよ。(再び舞臺の後面に來て)それからおついでにポパーさんにも案内状を差し上げて下さいまし。あの方は近頃世間で評判の金持のアウストラリア人でしてね。あの方のお父さんは罐詰を賣つて、それで財産をこしらへたのでございませう。何でも大層おいしい食物ださうです。ですが召使共は決して戴かうとは申さないだらうと思はれます。兎に角息子さんは大層面白い方なんです。あの方はアガーサの利口な話振りに、すつかり迷はされてゐるんですの。娘を手放すのは辛うございませう、と申して何時のシーズンにも娘を嫁に遣れないやうな母親は、ほんたうの愛情を持つてゐないものだと思はれますわ。ではまた今晚伺ひます。(パーカー扉中を開く)それからわたくしの申し上げたことをよく覚えていらつしやいませよ。早くあの人を田舎へ連れ出しておしまひなさいまし。それが何よりでございますよ。ではさやうなら。アガーサーや、さあ。

(公爵夫人並にアガーサ中より退場)

ウキンドグミーヤ夫人 まあ、何といふ怖ろしい事だらう。ダーリントンさんがおつしやつた結婚してから二年しきや經たない夫婦の話が、今になつてやうやう意味がわかつて來たわ。あの方に大變なお金

をやつたなんて、公爵夫人のおつしやつたことはまあほんたうだらうかしら。アサーが銀行の帳簿をしまつて置く處を知つてゐる。あの机の抽斗の中に違ひないが、あれを見ればわかるだらう。さうだわたくしはどうしても探し出してやらう。(抽斗を開ける)いいえ、いいえ、そんな事はある筈がない。(立つて中へ行く)誰かが根も葉もない悪口を云つたんだ! あの方はわたくしを愛してゐるのです。ええ、さうですとも! だがわたくしは帳面を見ては悪いかしら? わたくしはあの方の妻だ。わたくしには見る権利がある。(再び机に戻つて、帳簿を取り出して一枚一枚調べる。につこり笑つて、安心したやうな溜息をつく)まあ、これですつかりわかつたわ。あんな馬鹿馬鹿しい話には、一つだつてほんたうのことなんかありやあしなかつたんだ。(再び帳簿を抽斗に納める。納めた拍子にふと氣がついて、もう一つの帳簿を取り出す)此處に第二の帳簿がある。きつと内證の帳面だわ。――錠がかかつてゐる! (開けようとしたが旨くあかない。机の上の紙切りナイフを見て、それを持つて、帳簿の錠を切り、最初のページから調べ始める)六百ポンド――アーリン夫人、七百ポンド――アーリン夫人、四百ポンド――アーリン夫人、ああ、ほんたうだつた。ほんたうだつた。まあ怖ろしい! (帳簿を床に投げる)

(ウキンドグミーヤ卿中に登場)

ウキンドグミーヤ卿 お前、扇は未だ着かないかね?(右、中に来つて、帳簿を見る)マーガレットや、マーガレットや、お前は私の帳簿を開けて見たんだね。お前にはそんなことをする権利はないのだ!

ウキンドグミーヤ夫人 あなたは秘密を發かれたのが、けしからんとおつしやるのでせうね。

ウキンドグミーヤ卿 私は妻が夫を探偵するのが、けしからんと云ふのです。

ウキンドグミーヤ夫人 探偵などをいたしたのではございませんわ。わたくしはこんな女がある事さへ、半時前まではちつとも知らなかつたのでございます。でももうロンドン中に知れ渡つた事なんださうですつて。あるお方がわたくしに同情を寄せて下さつて、御親切にその事を知らせて下さつたのです。あなたは、毎日カーゾン街においてなさるんですつてね？ さうして馬鹿馬鹿しいほどのぼせ上つてその穢らしい女に、大變なお金を使つていらつしやるんですつてね！（左を横ぎつて）

ウキンドグミーヤ卿 マーガレット！ アーリン夫人のことをそんなに云ふものではありませんよ。お前はとんだ誤解をしてゐるのだ！

ウキンドグミーヤ夫人 （夫の方を向きながら）あなたは大層アーリン夫人の名譽を氣にかけていらつしやいますのね。わたくしの名譽も氣にかけて下さいまし。

ウキンドグミーヤ卿 お前の名譽は傷つけられやしないぢやないか。マーガレット、まあ、暫くそんな事は考へずにお置き。（帳面を机の中へ入れる）

ウキンドグミーヤ夫人 わたくしはあなたのお金の使ひ方が不思議だと考へて居りますの。唯それだけでございます。ですがわたくしはお金のことを氣にかけてゐるのぢやございませんのよ。わたくし達のものはどんなにお使ひなすつたつて、それはあなたの御勝手でございます。然しわたくしを愛してい

らつしやるあなたが、あなたを愛するやうにわたくしを仕込んで下さつたあなたが、純潔な戀愛からお金で買はれる戀愛へ、移つていらつしやつたことが心配だと申すのでございます。まあ、何といふ怖ろしい事です！（ソファに坐る）さうしてわたくしばかりが穢されたと思つて、あなたは何とも思つていらつしやらないのです。わたくしは穢されてしまつたと思ひます。すつかり穢されたと思ひますわ。この六箇月と云ふものが今のわたくしにはどんなに厭はしいものになつたか、とてもあなたにはおわかりがないでせう。あなたが下さつた接吻は思ひ出すさへ穢らはしうございます。

ウキンドグミーヤ卿 （夫人の顔を横きりながら）そんな事を云ふもんぢやない。私はこの世界中でお前より他に愛してゐるものはないのだから。

ウキンドグミーヤ夫人 （立ち上る）そんならこの女は何でございます？ 何故、あなたはこの女に家を持たせておやりになりました？

ウキンドグミーヤ卿 私はあの女に家など持たせてやりはしない。

ウキンドグミーヤ夫人 でも、その爲のお金をおやりになつたのではございませんか。そんなら同じ事ですわ。

ウキンドグミーヤ卿 マーガレット、私の聞いた處では、アーリン夫人は――。

ウキンドグミーヤ夫人 夫があるのでございますか。それとも、夫といふのは架空の人なのでございますか。

ウキンドミヤ卿 あゝの夫人の夫はずつと以前に死んでしまつたのだ。今ではひとりぼつちなのだ。
ウキンドミヤ夫人 親戚もおあんなさらないの？（問）
ウキンドミヤ卿 うん。

ウキンドミヤ夫人 をかしいぢやございませんかね？（左にゐる）

ウキンドミヤ卿 （左、中にゐる）マーガレット、私は今お前に話をしようとしてゐる——だから、もう少し私の云ふ事を聞いておくれ。——私の知つてゐる處では、アーリン夫人は身仕舞の正しい女なのだ。もし四五年前に——。

ウキンドミヤ夫人 まあ！（右、中を横ぎつて）わたくしはあゝの人の身の上なんかそんなに委しく伺ひたくはありませんわ。

ウキンドミヤ卿 （中の位置にゐる）私は委しい事を話さうとするのではないのだ。私は唯これだけの話をするのだ。——アーリン夫人も以前は世間から重ぜられ、敬愛せられた事もあつた。素性もよく、相當な地位もあつたのだが——夫人は何もかもなくしてしまつたのだ——まあお前に云はせれば自分からそれを捨ててしまつたのだ。だがその爲に尙更いたましい目に遭つたのだ。不運は堪へられない事はない——不運と云ふものは外から來る偶然な出來事なのだから。然し自分自身の過失の爲に、何時迄も苦勞をする——其處が人生の辛い處だ。もう二十年も前の話、あゝの夫人がほんの娘の時の事なんだ。あゝの夫人が人の妻となつてゐるのは、お前の今迄よりも短い間だつたのだ。

29
ウキンドミヤ夫人 わたくしはあゝの人の事など聞きたくはございません——どうぞあゝの人の事と、わたくしの事とを一口におつしやらないで下さいまし。とても取合せにはならないんですから。（机に向つて右に坐る）

ウキンドミヤ卿 マーガレット、お前はあゝの夫人を救つてやるわけには行かないかい。あゝの夫人は再び社會へ出たがつてゐる。さうしてお前の助けを求めてゐるのだよ。（夫人の前を横ぎる）

ウキンドミヤ夫人 わたくしに！

ウキンドミヤ卿 さうだ。お前に。

ウキンドミヤ夫人 何と云ふ厚かましい人でせう。（問）

ウキンドミヤ卿 マーガレット、私はお前にお願ひをする。アーリン夫人にお金をやつた事はお前に知らせないつもりだつたんだが、それが分つてしまつても、矢張りお前にお願ひをするのだ。どうぞあゝの婦人を今夜の會に招待しておくれ。（夫人の坐つてゐる左の位置に立ちながら）

ウキンドミヤ夫人 あなたは本當にどうかしていらつしやいます！（立ち上る）

ウキンドミヤ卿 いや、是非お前に頼むのだ。世間では兎や角といふんな噂をするけれど、然し世間では誰もあゝの夫人のことをよくは知つてゐないのだ。あゝの夫人はいろいろな家にもたつたことがある。もつともお前の行くやうな家にもたつたことはないかもしれない。それでも近頃の所謂交際社會の婦人達が行くやうな家にもたつたことがある。然しそれだけでは、満足してゐないのだ。あゝの夫人は是非一

遍、お前に呼んで貰ひたいのだ。

ウキンドミヤ夫人 それはあの女の勝利としてでございますね？

ウキンドミヤ夫人 いや、お前が善良な婦人であるといふ事を知つてゐるからだ——それにもし一遍でも此處へ来れば、今迄よりはもつと確實な、もつと幸福な生活の機會が得られるだらうと思つてゐるからだ。あの婦人はそれ以上お前と近附きにならうとは思つてゐない。お前は、もう一遍世の中へ出たがつてゐる婦人を救つてやる氣はないかい？

ウキンドミヤ夫人 いいえ、いやでございます。もしあの女がほんたうに後悔したのなら、自分を破滅させたり、その破滅を見てゐたりした世の中へ、歸つて来たいと思ふ筈はございませんわ。

ウキンドミヤ夫人 私はお前に頼んでゐるのだ。

ウキンドミヤ夫人 (横ぎつて右の位置の扉に進み) わたくしは晚餐の服装をしに参ります、どうぞ今夜は二度と再びその話をなさらないで下さい。アーサー(夫のそばに歩きながら) あなたはわたくしが、父も母もないものだから、この世の中でひとりぼつちだと思つていらつしやるのね。さうしてわたくしを御都合のいいやうにあしらへると思つていらつしやるのね。けれどもそれは大間違ひでございます。わたくしには友達がございます。澤山の友達がございます。

ウキンドミヤ夫人 (左、中の位置) マーガレット、お前は無分別な、馬鹿なことを云つてゐるのだ。私はお前と議論をしたくはないが、然し今夜、アーリン夫人を招待することは何處迄もお前にお頼み

する。

ウキンドミヤ夫人 (右、中の位置) そんなことをするわけにはまゐりません。(左、中を横ぎりながら)

ウキンドミヤ夫人 お前は厭だと云ふのかね？(中の位置)

ウキンドミヤ夫人 はい、眞平でございます！

ウキンドミヤ夫人 まあ、マーガレット、私の爲だと思つて招待しておくれ。あの夫人の最後の機會なのだから。

ウキンドミヤ夫人 それがわたくしに何の關係がございませう？

ウキンドミヤ夫人 善良な女といふものは、どうしてこんなに剛情なのだらう！

ウキンドミヤ夫人 悪い男と云ふ者は、どうしてそんなに弱いのでせう！

ウキンドミヤ夫人 マーガレット、男と云ふものは一人として、妻となる女が満足する程、善良ではないかもれない——それはさうに違ひない——然しお前はつまらないことを考へてはいけなないよ。私がかつて一度だつて——ああ、こんな話は、さう云はれただけでさへ不愉快なのだ！

ウキンドミヤ夫人 だつて、あなただけが他の男と違つてゐるわけはございますまい？ ある賤しい感情の爲に、生命を浪費してゐない夫は、ロンドンに一人もないといふ事を、わたくしは聞いて居りますの。

ウキンドミヤ卿 私はその中の一人ではない。

ウキンドミヤ夫人 餘りあてにはなりませんわ！

ウキンドミヤ卿 お前は口ではさう云つても、心では私を信じてゐるのだ。そんなにお互の仲を悪くするやうなことを云ふものではない。たつた今し方二三分の間に、私達の間には大變な距離が出来てしまつたぢやないか。まあ、腰をかけてその招待状を書くがいい。

ウキンドミヤ夫人 どんな事があつても、書くわけにはまゐりませんわ。

ウキンドミヤ卿 (テーブルの處へ来る)では、私が書く！(ベルを鳴らして、腰をかけて、案内状を書く)

ウキンドミヤ夫人 あなたは本當にあの女を招待なさられるのでございますか。(夫の處へ進み來つて)

ウキンドミヤ卿 さうだ。(間)

(パーカー登場)

パーカー！

パーカー はい。(左、中へ来る)

32
ウキンドミヤ卿 この手紙をカーゾン街八十四番地A號アーン夫人の處へ持つておいで。(左、中へ行き、手紙をパーカーに渡す)返事は要らないのだ！

(パーカー中より退場)

ウキンドミヤ夫人 アーサー、あの女が此處へ來れば、わたくしは侮辱してやりますよ。

ウキンドミヤ卿 マーガレット、そんな事を云ふものではない。

ウキンドミヤ夫人 いいえ、わたくしはやつて見せます。

ウキンドミヤ卿 これ、お前がそんなことをすれば、ロンドン中で、お前を笑はない女はありませんよ。

ウキンドミヤ夫人 ロンドン中でわたくしを褒めない善良の女はございませんわ。わたくし達は餘り寛大すぎました。わたくし達はいい手本を見せなければいけません。わたくしは今夜からやうと思ひますわ。(扇を取り上げながら)さうです、あなたは今日わたくしにこの扇を下さいましたわね。誕生日のお祝に下さいましたのですわね。もしあの女が家の敷居をまたいだなら、わたくしはこれであの女の顔を打つてやります。

ウキンドミヤ卿 マーガレット、お前はそんなことをしてはなりません。

ウキンドミヤ夫人 あなたにはわたくしの心はわかりませんわ。(右に移る)

(パーカー登場)

パーカー！

扇の人夫ヤーマンキウ
パーカー はい。

ウキンドミヤ夫人 わたくしは自分の部屋で御飯を食べます。ほんたうに御飯なんかたべたくはないわ。十時半までに、すっかり支度が出来上つてゐるやうにしておくれ。パーカー。今夜は、お客様の名前をはつきりと呼び上げておくれよ。お前は時々早口に云ふから聞き取れないことがありますよ。わたくしは間違ひのないやうにはつきりとお名前を聞いて置きたいの。いいかい、パーカー。

パーカー はい、畏まりました。

ウキンドミヤ夫人 ああそれでよろしい。(パーカー中より退場、ウキンドミヤ卿に話かけながら)

アーサー、あなたに御注意申しますが——若しあの女が此處へまゐりましたら——

ウキンドミヤ卿 マーガレット、お前は私達を破滅させるのだ。

ウキンドミヤ夫人 わたくし達ですつて！ わたくしの生涯はもうあなたの生涯とは別れてしまつたのです。然しあなたが多勢の前で恥をかくなのがお厭だつたら、すぐにあの女に手紙を書いておやりなさい。さうしてあの女が此處へ来ることはわたくしが許さないと云つてゐると、知らせておやりなさい。

ウキンドミヤ卿 いやそれはなりません——そんな事は出来ないのだ——あの女はどうあつても來なければならぬのだ！

ウキンドミヤ夫人 そんなら、わたくしは今申し上げた通りにいたします。(右に行く) あなたはわ

たくしをさういふ羽目にさせたのです。(右より退場)

ウキンドミヤ卿 (妻を呼びながら) マーガレット！ マーレガット！(間) ああ！ どうしたらいいだらう？ 私は妻にあの女の眞實を打ち明けるわけには行かないのだ。打ち明けたらきつと、恥かしくつて生きてはゐられないだらう。(椅子にどつしりと腰を下して両手で顔を掩ふ)

第二幕

場面——ウキンドミヤ家の應接間、扉右、奥、は樂隊の盛んなる舞蹈室に向つて開かれ、扉左、そこから客が這入つて來る。扉左、奥、は電燈の輝ける見晴に向つて開け放たれる。棕櫚、草花、きらめく燈火、部屋にはお客がいつばいゑある。ウキンドミヤ夫人は客に應接してゐる。

バアリック公爵夫人 (中に來つて) ウキンドミヤさんがいらつしやらないのはをかしいわね。ホパーさんがまた大變に遅いこと。アガーサや、お前、あの人と五遍ダンスをする約束をしたのかい。(後面に戻つて)

アガーサ嬢 はい、お母さま。

バアリック公爵夫人 (ソファに坐りながら) 一寸お前の招待状を見せておくれ。ウキンドミヤの奥さんが、カードの招待状を復活なすつたのは、ほんたうにいい事だわ——かうしてくれさへすれば、娘を持つ母親はみんな安心するでせうよ。ねえ、アガーサや。(招待状の中にある踊の番組の名前



を、二つ削り取りながら）お行儀の好い娘は、あんな若い息子たちとワルツを踊るものではないよ。何だか間が早すぎて見場のいいものではないからねえ！ お前、お終ひの二つの舞蹈の時は、ホパーさんと一緒に見晴しへ出てゐてもいいよ。

（ダンビイ氏とプリムデール夫人とが舞蹈室より登場）

アガーサ嬢 はい、お母さま。

バアリック公爵夫人 （扇を使ひながら）あすこの空気はほんたうにいい氣持だことね。

パーカー クーパー・クーパー夫人。スタットフィールド夫人。ジェームス・ロストン閣下。ガイ・バークレー様がお見えになりました。

（それ等の人々登場）

ダンビイ スタットフィールドの奥さま、今晚は。これがこのシーズンの最後の舞蹈になるんでございませうね。

スタットフィールド夫人 さうでございませうね。ダンビイさん。でも愉快なシーズンでございましたわねえ。

ダンビイ はあ、大いに愉快でした。公爵夫人、今晚は、これがこのシーズンの最後の舞蹈になるんでございませうね。

バアリック公爵夫人 さうでございませうね。ダンビイさん。非常に氣分のだれたシーズンでございま

したわね。

ダンビイ 怖ろしくだれたシーズンでしたな。

クーパー・クーパー夫人 ダンビイさん今晚は。これがこのシーズンの最後の舞蹈になるんでございませうね。

ダンビイ いや、さうぢやありません。少くともまだ二回ぐらゐはございませう。（プリムデール夫人の方へ戻つて来る）

パーカー ラフォード様。ジエツドバラア夫人。グレーム嬢。ホパー様がお見えになりました。

（それ等の人々登場）

ホパー 奥さん御機嫌よろしうございます。（ウサンダミーヤ夫人に云ふ）公爵夫人御機嫌よろしうございます。（アガーサにお辭儀をする）

バアリック公爵夫人 まあ、ホパーさん、ようこそお出で下さいました。大層お早うございましたこと。あなたは此の頃ロンドン中で、引つ張り風になつていらつしやるんですつてね。

ホパー さすがにロンドンは大都會です。ロンドンの人達はシドニーの人達のやうに、交際嫌ひではございませんな。

バアリック公爵夫人 わたくし達はあなたのことをよく存じて居りますのよ。ホパーさん。あなたのやうなお方がもつと外にも多勢おいでになると、世の中と云ふものは、もつと氣樂になりませうにね。

ホパーさん、あなたは御存じていらつしやいませうが、アガーサとわたくしはアウストラリアの事に、大變興味を持つて居りますの。あの愛らしい、小さなカンガルが飛び廻つてゐたら、さぞ面白いでございませうね。アガーサはアウストラリアを地圖で見つけたのですつて。何といふ不思議な恰好をしてゐるのでせう！ ちやうど大きな靴のやうでございませうね。ですが、あれはつい近頃、開けた土地なんでございませう？

ホパー アウストラリアだつて、何處の土地だつて、同じ時代に出来たものではございませんか？ 奥さん。

バアリック公爵夫人 まあ、うまい事をおつしやいますこと。あなたは獨得の頓智を持つていらつしやるのね。でもわたくしの側へばかりお引きとめしてはなりません。

ホパー 奥さん、私はアガーサさんと御一緒にダンスがいたしたうございませう。

バアリック公爵夫人 さあ、あの子もまだ踊るつもりなのでございませうよ。アガーサや、お前まだ踊るのだらうね？

アガーサ はい、お母さま。

バアリック公爵夫人 これからすぐに踊るのかい？

アガーサ はい、お母さま。

38 ホパー では御一緒に願ひたいものですが。

(アガーサ肯く)

バアリック公爵夫人 ホパーさん、此の子はおしやべりでございますから、どうぞお氣をおつけなすつて。

(アガーサとホパーは舞踏室へ行く)

(ウキンダミーヤ卿左に登場)

ウキンダミーヤ卿 マーガレット、ちよつとお前に話がある。

ウキンダミーヤ夫人 まあお待ち下さいまし。

(音楽止む)

パーカー アウガスタス・ロートン卿。

(アウガスタス卿登場)

アウガスタス 奥さん、今晚は。

バアリック公爵夫人 ジェームスさん。わたくしを舞踏室へお連れ下さいませんか。アウガスタスとは今晚一緒に御飯を食べましたので、差し當りアウガスタスの相手はもう澤山でございます。

(ジェームス・ロートンは公爵夫人と手を組んで、舞踏室へ連れ立つて行く)

パーカー アーサー・ポテン様、竝に御夫人、ベースレー卿、竝に御夫人。ダーリントン卿。
(これ等の人々パーカーの臺辭につれて登場)

アウガスタス (ウキンドミーヤ卿に近寄りながら) ちよつと君に、折入つて話したいことがあるのだがねえ。僕は見る影もなく痩せてしまつたよ。ねえ君、さうは見えないかい？ 僕等はなかなか實際の通りには見えないものだて。だからほんたうに困つちまふ。話と言ふのは他の事でもないんだが、あの女は一體何者だい？ 何處から來たんだい？ 何故あの女には一人も身寄りがないのだらう？ 親類なんて云ふものは、どうせ碌なものぢやないけれど、それでも、そんなものがあれば世間では信用するからなあ。

ウキンドミーヤ卿 君はアーリン夫人のことを云ふのかね？ 僕はやつと半年前に會つたばかりなのだ。それまではあの女の事なんぞちつとも知らなかつたんだ。

アウガスタス でもそれから後あの女とは、ちよいちよい會つてゐるんだらう。

ウキンドミーヤ卿 (冷淡に) うん、その後はあの女と度々會つてゐる。今も會つて來たばかりなのだ。

40
アウガスタス ああ、さうだつたか！ だが女共はみんなあの女を悪く云つてゐるぜ。今夜も僕はアラベラと一緒に食事をしたが、まああの女は、アーリン夫人に就いてどんなことを云つたと思ふ？ 殆どあの夫人を完膚なきまでにこき下したものだ——(横を向いて) 僕とバアリックとは、アラベラに、そんな事はどうだつていい、要するにあの夫人は極めて立派な容貌を持つてゐるんだから、と云つてやつたんだ。すると君、アラベラがどんな顔附をしたと思ふ？——處で一寸聞いてくれ給へ。僕

41
はアーリン夫人をどうしていいかわからないが、ことによるとあの女と結婚するかもしれないよ。何しろあの女は僕をたまらなく冷淡に取り扱ふんだからね。それにあの女は恐ろしく利口だ。あの女はどんな事でも承知してゐる。君の事もちゃんと承知してゐる。いろいろと違つた方面から君のことをちやんと説明してゐるんだ。

ウキンドミーヤ卿 アーリン夫人と僕との友情に就いては、別に何等の説明もいらぬのだ。

アウガスタス ふん、まあいいから聞き給へ。君はあの女がこの社交界と呼ぶ厄介な場所へ、顔を出すと思つてゐるのかい？ 君はあの女を奥さんに紹介したいのかい？ 何もそんなに廻りくどいことをするには及ばないぢやないか。君はそんな事がしたいのかね？

ウキンドミーヤ卿 アーリン夫人は今夜此處へ來るのだ。

アウガスタス 君の奥さんはあの女に招待状を出したのかね？

ウキンドミーヤ卿 アーリン夫人は招待状を受け取つたのだ。

アウガスタス それぢや、あの女はやつて來るだらう。然し君はなぜその事を前以つて話してくれなかつたのだね？ 話してくれれば、僕も餘計な心配をしなくて済んだのだ。

(アガーサとホパーとは背後を横ぎつて、見晴し左、奥、端に出る)

パーカー セシル・グレイム様。

(セシル・グレイム登場)

セシル・グレイム (ウキンドグミーヤ夫人に挨拶をしてその前を過ぎ、ウキンドグミーヤ卿と握手をする)
 アーサー、今晚は。なぜ君は僕の健康を尋ねてくれないのだ？ 僕は人から自分の健康を聞かれるのが好きなんだよ。さうされると、みんなが自分の事を心配してくれることが知れて大いに愉快なのだ。處で、今夜は體の工合がちつとよくないんだ。僕は家の者と一緒に食事をして來たのだが、家の者といふものはどうしてあんなにつまらないのだらう？ 親父は相變らず食事の後でお説教をやるだらうぢやないか。僕は親父に、あなたはもう少しものがわかつてもいい年頃だとさう云つてやつたよ。だが僕の經驗によると、人間はものがわかりかけてもいい年頃になると、豈圖らんやすつかり耄碌してしまふのだ。おい、タッピー！ 君はまた結婚するんださうだね。あんな遊戯には、大概あきてるさうなもんだがね。

アウガスタス くだらんこと云ふなよ。ほんたうにくだらん！

セシル・グレイム ついでにちよつとお尋ねするが、ええと、どつちだつたらう？ 君は二度結婚して、一度離縁したのだつたかね？ それとも二度離縁して一度結婚したのだつたかね？ 二度離縁して一度結婚したのだらうな。どうもその方がほんたうらしい。

アウガスタス 僕は非常に記憶が悪いから、どつちだかはつきり覚えてゐない。(右へ去る)

プリムデール夫人 ウキンドグミーヤさん、わたくし、あなたに折り入つてお話しいたしたいことがございますの。

ウキンドグミーヤ卿 まことに勝手にございますが、只今ちよつと妻の處へまゐらなければなりません。どうぞ御免下さい。

プリムデール夫人 まあ、あなた、そんなことを決してなさるものぢやございませんよ。當節は、殿方が大勢の前で奥さんを大切になさると、とんだ誤解を受けるものでございますよ。そんな男はきつと二人ぎりの時には、奥さんをなぐるのだらうなんて、世間の人達から思はれますよ。夫婦仲が睦じさうに見えようものなら、世間はそれを妙に疑ふんですから。まあ、そのことはいづれ晚餐を頂きながらお話しいたませうね。(舞蹈室の扉の方へ行く)

ウキンドグミーヤ卿 (中の位置) マーガレット、私は是非ともお前に話をしなければならぬ。

ウキンドグミーヤ夫人 あなた、この扇を持つてゐて下さいませんか。ダーリントンさん、ありがたう。

(ダーリントン卿の所へ行く)

ウキンドグミーヤ卿 (夫人の側へ来て) マーガレットや、お前さつき食事の前に云つたことは、あれは無論嘘なんだらうね。

ウキンドグミーヤ夫人 あの女は今夜参りはいたしません。

ウキンドグミーヤ卿 (右、中の位置) アーリン夫人は此處へ來るのだ。若しお前があつた夫人を恥かしめたり何かすれば、それは結局私達の恥辱になり苦痛になるのだよ。それをどうかよく覚えておくれ！ いいかい、マーガレット！ どうぞ私を信用してくれ！ 妻は當然夫を信用すべきものだ。

ウキンドミーマ夫人 (中の位置) ロンドンには夫を信用してゐる女が大勢居りますわ。一目でそれがわかるんですの、その女達は非常に不幸に見えますから。わたくしはさう云ふ女達になりたくごいませんわ。(立ち上る) ダーリントンさん、どうぞわたくしの扇を返してくださいな。ありがたう——扇と云ふものは重寶なものでございますわね。さうぢやなくつて。——わたくしは今夜はお友達が欲しいのです。ダーリントンさん、わたくしはこんなに早くお友達が欲しくならうとは思ひませんでしたわ。

ダーリントン卿 奥さん！ かう云ふ時が何時か来るだらうと思つて居りましたが、しかしどうして今夜？

ウキンドミーマ卿 夫人に知らせてやらう、さうしなけりやならない。騒ぎが起つたら大變だ。マーガレット——。

パーカー アーリン夫人。

(ウキンドミーマ卿吃驚して立ち上る。アーリン夫人登場、極めて派手な服装、至つて嚴かに。ウキンドミーマ夫人扇をしつかり握らうとして床に落とす、さうしてアーリン夫人に冷淡な挨拶をする。アーリン夫人は丁寧に禮を返して、室内に歩みを運ぶ)

ダーリントン卿 奥さん扇をお落しになりましたよ。(扇を拾つて、ウキンドミーマ夫人に渡す)

44
アーリン夫人 (中の位置) ウキンドミーマさん、御機嫌よろしうございます。何といふ御綺麗なお奥さ

んでございませう！ まるで繪でございますわねえ。

ウキンドミーマ卿 (低い聲で) あなたが此處へいらつしやるのは無謀なことです。

アーリン夫人 (微笑しながら) いいえ、わたくしのした事の中では一番いいこととございましたわ。さうしてあなた、どうぞ今夜わたくしによく氣をつけて下さいまし。わたくしは御婦人の方々が氣になりますの。あなたはわたくしを御婦人の方々に、おひき合せなすつて下さいましな。男の方ならば何時でもお相手が出来ますけどね。アウガスタスさん、御機嫌よろしうございます。さつぱりお見えになりませんか、わたくしは昨日からあなたにお目にかかりませんわ。あなたは薄情なお方だね、みんながさう申しますわ。

アウガスタス卿 (右の位置) アーリンさん、さあ、その事は一寸説明させていただきたいのですが。

アーリン夫人 (右、中の位置) お止めなさいましよ、アウガスタスさん。説明するなんてあなたの柄にないことなんですわ。其處があなたの愛嬌なんですもの。

アウガスタス卿 やあ、もし私に愛嬌があると思召すなら——

(二人互に話をしてゐる。ウキンドミーマ卿は心配さうに部屋の中をぶらつきながら、アーリン夫人を見守つてゐる)

ダーリントン卿 (ウキンドミーマ夫人に向つて) あなたは大層顔色がお悪いぢやございませんか。

ウキンドミーマ夫人 臆病者は何時も蒼い顔をしてゐます！

ダーリントン卿 あなたは眩暈がなさるやうですね。見晴しへ出ようぢやございませんか。
ウキンダミーヤ夫人 はい、(パーカーに向つて)パーカーや、わたくしの外套を出しておくれ。
アーリン夫人 (ウキンダミーヤ夫人の方へ行きながら)奥さん、見晴しの灯がきらきらと光つて、ほんたうに綺麗でございますこと。羅馬のドリア公爵のお宅を思ひ出しますわ。

(ウキンダミーヤ夫人冷淡に肯いて、ダーリントン卿と共に去る)

おや、グレームさん、御機嫌よろしう。ジェットバラ夫人はあなたの叔母さんでいらつしやいますの？ あの方とお近付きになりたうございますわ。

セシル・グレーム (一寸躊躇して迷惑さうに) ああ、よろしうございます、お望みなら、御紹介いたしませう。カローリンの叔母さん、アーリン夫人を御紹介いたします。

アーリン夫人 奥さま、お目にかかれて嬉しうございます。(彼女と並んでソファに腰をかける)あなたの甥御様と、わたくしとは親友でございますの。わたくしはこの方の政治上の経歴に、大變興味を持つて居ります。きつとこの方は偉大な成功をなさいますわ。この方は保守黨の思想を持つていらつて、しかも急進黨のやうな辯舌をもつていらつしやいます。それが今日の時勢では何より大切なことでございますわ。ほんたうにこの方は素晴らしい雄辯家でいらつしやいますのね。わたくし共は、この方がどなたから雄辯を受けついでかよく存じて居りますわ。昨日も公園でアランデル卿が噂をなすつていらつしやいましたわ。グレームさんの話振りは、叔母様にそっくりでいらつしやいます

つて。

ジェットバラ夫人 (右の位置) さうおつしやられると、ほんたうに嬉しうございますわ！(アーリン夫人微笑する。さうして會話を續ける)

ダンビイ (セシル・グレームに向つて) 君はアーリン夫人をジェットバラ夫人に紹介したのかい？
セシル・グレーム うん、紹介した。しないわけに行かなかつたんだ。あの女は人を自分の思ふ通りにしてしまふ。どうも不思議だ。

ダンビイ あの女につかまつたら大變だなあ！(プリムデル夫人の方へぶらついて行く)

アーリン夫人 (中の位置、ジェットバラ夫人に向つて) 木曜日でございますね？ ええ是非。(立ち上つて、笑ひながらウキンダミーヤ卿に話しかける) あんな年寄りの後家さん禮儀を盡すなんて、ほんたうにめんだう臭いわ！ でもあの人達は年中禮儀をやかましく云つてゐるんですね。

プリムデル夫人 (ダンビイに向つて) あの、ウキンダミーヤさんと話をしてゐる立派な服装をしてゐる方はどなたでせう？

ダンビイ ちつとも御存じないのですか！ あの女はちよつとイギリス人向きにこしらへた、いかがはしいフランス小説の特製本のやうですな。

アーリン夫人 ダンビイさんはプリムデル夫人と話をしてゐるのかしら？ あの夫人は恐ろしくダンビイさんを妬いてゐるんですつてね。あの方は今夜は餘りわたくしのそばに寄りつかないやうだ。あ

の人はきつと夫人を怖がつてゐるんだわ。あの藁のやうな色をした婦人達は怖い人達ですものね。ウキンダミーヤさん、わたくしは初めにあなたと一緒に踊りませう。(ウキンダミーヤ卿唇を噛んで顔を顰める) さうするときはつとアウガスタスさんが妬きますわ。アウガスタスさん! (アウガスタス卿は彼女の傍に来る) ウキンダミーヤさんがね、最初にわたくしと踊らうと云つて承知なさらないの、今夜はあの方が御主人なのだから、おことわりするわけには参りませんわ。わたくしは直ぐにもあなたと踊りたかつたんですのに。

アウガスタス卿 (丁寧に頭を下げて) 是非さう願ひしたいものです。

アーリン夫人 あなたは何も彼も御承知でいらつしやるのでせう。あなたとなら何時まで踊り続けても少しも飽きない人があるんですよ。

アウガスタス卿 (手を白いチョツキの上に置いて) ああ、ありがたう、ありがたう、あなたはすべてのレーデイの中で、最も尊敬すべきお方です。

アーリン夫人 まあ嬉しいことをおつしやるわね。淡白で、實意があつて。わたくしは丁度さうしたことを云はれるのが大好きですの。さあわたくしの花束を持つて下さいな。(ウキンダミーヤ卿の腕に寄りて舞蹈室へ行く) あら、ダンビイさん御機嫌よろしう。此の間は三度とも留守にいたしました大層失禮いたしました。金曜日に御飯を差し上げますからいらしやいましたな。

ダンビイ (ひどく冷淡に) やあ、ありがたう。

(プリムデール夫人目を光らせてダンビイを睨む。アウガスタス卿花束を持ちながら、アーリン夫人とウキンダミーヤ卿に従つて舞蹈室に行く)

プリムデール夫人 (ダンビイに向つて) あなたは何といふ卑しい方でせう! あなたのおつしやることは一つだつて信じられませんわ! あなたはあの女を知らないつてわたくしにおつしやつたではございませんか。あなた、どう云ふお積りで、あの女を三度も續けてお訪ねになりましたの? あなたはあの女の家へ呼ばれていらつてはなりません。無論そんな事は御承知でせうねえ。

ダンビイ ローラさん、呼ばれて行かうなんて、夢にも思つてゐやしませんよ。

プリムデール夫人 あなたはまだあの女の名前を聞かせて下さらないぢやありませんか、あの女は何といふ名?

ダンビイ (軽く咳をして、髪の毛を撫でながら) アーリン夫人と云ふ方です。

プリムデール夫人 あの女が!

ダンビイ さうです、みんながさう呼んで居ります。

プリムデール夫人 それは面白いこと! ほんたうに面白いわ。ではもつとよく見てやりませう。

(舞蹈室の入口に行き、中を覗き込む) わたくしはあの女についていろいろの怖ろしい話を聞いてゐます。なんでもあの女はウキンダミーヤさんをいい食ひものにしてゐるのださうです。さうしてまあ、ウキンダミーヤの奥さんは何だつて御丁寧にあの女を招待なすつたのだらう! 何といふ面白いこと

だらう！ 餘程人のいい女でなければ、あんな馬鹿げたことは出来はしないわ。あなたは金曜日にあの女の處へ行くんでせうね！

ダンビイ 何故です？

プリムデール夫人 わたくしはあなたにわたくしの夫を連れて行つて貰ひたいの。あの人は此の頃わたくしのそばにへばりついてゐて、ほんたうにうるさくつてしやうがないのよ。あの女ならちやうどあの人にお誂へ向きだわ。あの人はあの女がいやと云ふまではそばについてるでせうし、さうなればわたくしの邪魔がなくなります。わたくしああいふ種類の女は非常に必要だと思ふわ。ああ云ふ人達がわたくし達の結婚の土臺になるのだから。

ダンビイ あなたは不思議なお方ですな！

プリムデール夫人 (男の顔をちつと見詰めて) あなたも不思議な方だといいですけれど。

ダンビイ 私も——自分にだけは不思議な人間に思はれます。私が世界中で十分に知り盡したいと思ふのは、このわたくしといふ人間です。然し今の處どうしてもその機會がないのです。

(二人は舞踏室に入る。ウヰンダミーヤ夫人とダーリントン卿とが見晴しからはひつて来る)

ウヰンダミーヤ夫人 ええ、あの女が此處へ来るなんてとんでもないことですよ。わたくしにはとても我慢が出来ませんわ。あなたがさつき、お茶の時間におつしやつた言葉の意味がやつとわかりましたわ。何故あなたははつきりとおつしやつて下さいませんか？ おつしやつて下さればよかつた

のに？

ダーリントン卿 それは私には出来ませんでした！ 他人のことをさう云ふ風に話すわけには行きません！ ですが今夜あの人があつた女を此處へ呼ぼうとしてゐることがわかつてゐたら、その積りで私もあなたにお話ししたかも知れません。さうすれば兎も角あなたは恥を掻かないで済んだでせう。

ウヰンダミーヤ夫人 わたくしがあつた女を呼んだのではございません。夫が是非あつた女を呼べと申しまして、わたくしの頼みもわたくしの申し附けも聞いてはくれなかつたのです。ああ、わたくしの家は穢されてしまひました。あの女がわたくしの夫と踊り始めたら、わたくしはみんなに笑はれるでせう？ わたくしは一體何のお蔭で、こんな侮辱を受けるのでせう？ わたくしは夫に自分の生涯を悉く捧げてしまひました。それなのに夫はそれを自分のものにして、いいやうに利用して、めちやめちやにしてしまつたのです。わたくしは自分にさへ淺ましい人間に見えますわ。けれどもわたくしには勇氣がありませんわ、わたくしは臆病なんですもの。(ソーフアに腰をかける)

ダーリントン卿 いや、あなたとしては、さう云ふ夫と同棲していらつしやることは出来ないでせう。あの人と一緒にいらつたら、あなたの生涯はどうなることとせう。あなたは夫が年中自分に嘘をついてゐると思ふやうになりませう。あなたは夫の目付きでも、言葉でも、接吻でも、感情でも、みんな嘘だと思ふやうになるでせう。夫が他の女に飽きると、あなたは夫を慰めてやらなければならぬ。夫が他の女に溺れてゐても、夫が歸つて来ればあなたは夫の御機嫌をとらなければならぬ。あ

あなたは夫の實生活の假面に使はれ、夫の祕密を隠す覆にされてしまひます。

ウキンドミヤ夫人　ほんたうにおつしやる通りでございます——怖ろしい事ですが、あなたのおつしやる通りです。ですがわたくしは誰方を頼りとしたらいいのでございませう。ダーリントンさん、あなたはわたくしの友達になつて下さるとおつしやいましたね！ わたくしはどうしたらいいのか教へて下さいまし。さあ、どうぞわたくしの友達になつて下さいまし。

ダーリントン卿　男と女との間には、友人関係と云ふものはないのです。其處には情熱とか、敵意とか崇拜とか、戀愛とかがあるばかりです。然し友人関係と云ふものはありません。私はあなたを愛して居ります——。

ウキンドミヤ夫人　いいえ、いいえ！（立ち上る）

ダーリントン卿　私はあなたを愛して居ります！ 私にとつてはあなたは全世界の何ものにもまして尊いものです。あなたの夫は何をあなたに與へたでせうか、何も與へたものはないぢやありませんか。あの人が持つてゐるものは、皆あの忌はしい女に與へられてしまつたのです。あの人はその女をあなたの宴會へ、あなたの家庭へ連れ込んで來て、しかも皆の前であなたに恥を掻かせたではありませんか。私はあなたに私の生命を捧げます。

ウキンドミヤ夫人　ダーリントンさん！

ダーリントン卿　私の生命——私の全生命を捧げて居ります。この生命を捧げますから、どうぞ御自由

になすつて下さいまし——私はあなたを愛して居ります、——私はあなたを愛する程にこれまで誰をも愛したことはございませぬ、私はあなたにお目にかかつた瞬間からあなたを愛して居りました。盲目的に崇めるやうに熱烈にあなたを愛して居りました！ あなたはその時それを御存じなかつたのでせう——然しあなたは今こそそれがおわかりになつたでせう。今夜のうちに此の家を立ち退いておしまひなさい、私は決して世間の思惑などはどうでもよいとは申しませぬ。世の取り沙汰や、社會の批評は皆重大なことです。然し人間と云ふものは、完全に、十分に、徹底的に生活をするか——それとも偽善に満ちた世間の掟に従つて、虚偽な、淺薄な、墮落した生活をするか——二つに一つを選ばなければならぬときに立ち至ることがあります。今あなたはその瞬間に立つていらつしやるのです。さあ、あなたは二つのうちを選ばなければなりません。さあ、どちらをお取りになりますか。

ウキンドミヤ夫人　（靜かに男のそばを離れながら、興奮した目附でちつと男を見詰めて）わたくしにはその勇氣がございません。

ダーリントン卿　（女の後を追ひながら）いいえ、あなたは勇氣を持つていらつしやいます。この後半年の間は苦しいこともございませう。いやそれ處か、不名譽なこともございませう。然しあなたがあの人の姓を捨てて、私の姓を名乗る時が來れば、何も彼もうまくまゐります。マーガレット、私の戀人、私の妻、——さうです。何時かあなたは私の妻になるのです。あなたはほんたうに私の妻です。あなたはきつと御承知の筈です。あなたは現在どう云ふ立場にいらつしやるのです？ 當然あなたに

屬してゐる地位を、あの女がとつてしまつたのではございませんか。さあ！ 出ておしまひなさい。悠々と大手を振つて、口元に微笑を含んで、勇氣に満ちた目付きをして、この家を出ておしまひなさい。あなたが家出をなさる譯はロンドン中の人が知つて居ります。誰があなたを悪く申しませう。そんな事を云ふ者は一人も居りません。萬一兎や角云はれた處で、それが何でせう。何が悪いとがございませう。悪いのは男の方です。卑しい女に妻を見替へた男の方が悪いのです。さう云ふ夫と同棲して居れば女の方が悪いのです。あなたは此の間、物事に對して一步も假借しないとおつしやいましたね。今こそ假借をなすつてはいけません。勇氣をお出しなさいまし。何處までも我をお通しなさい。ウキンダミーヤ夫人 わたくしは我を通すのが怖ろしいでございます。どうぞ考へさせて下さいまし。待たせて下さいまし、わたくしの夫はわたくしのものになるかもしれせんわ。(ソファに腰をかける)

54

ダールントン卿 するとあなたはあの人を取り返したいと思つていらつしやるのですか。私はあなたを買ひ被つて居りました。あなたは矢張り世間並の女でいらつしやる。あなたは世間の賞讃などは、眼中に置かないとおつしやりながらそのくせどんな辛い目に逢つても、世間の非難は避けようとしていらつしやる。一週間もたてば、あなたはあの女と一緒に公園を馬車で乗り廻すやうになるでせう。あの女は毎日のやうにあなたの處へやつて来て——あなたの親友になるでせう。あなたはこのやうな關係を一息に斷ち切らうとなさらないで、どんなことでも辛抱しようとしていらつしやる。まあそれで

結構でございます。あなたはちつとも勇氣がおあんなさらない！
ウキンダミーヤ夫人 ああ、どうかわたくしに考へる時間を與へて下さい。わたくしは直ぐに御返事は出来ません。(顫へる手先で額を押さへる)

ダールントン卿 直ぐにでなければもう駄目です。

ウキンダミーヤ夫人 (ソファから立ち上つて) そんなら駄目でも仕方がございせんわ！(間)

ダールントン卿 あなたはちつとも私の心を察して下さらない！

ウキンダミーヤ夫人 わたくしの心はもうとうに破れて居ります。(間)

ダールントン卿 私は明日英國を立ち去ります。これがあなたにお目にかかる最後でございます。あなたは二度と再び私に逢ふ事はございますまい。我々の生命は、我々の魂はたつた一瞬間觸れ合つたばかりでした。もう決して觸れ合ふ時は参りません。さやうなら、マーガレット。(退場)

ウキンダミーヤ夫人 わたくしは生涯獨りぼつちだ！ 何と云ふ恐ろしい事だらう！

(音樂止む。バアリック公爵夫人と、ペースレー卿とが笑ひながら話をしながら登場する。續いて他の客もそろそろと舞踏室から登場)

バアリック公爵夫人 マーガレットさん、わたくしは今アーリン夫人と大變愉快な話をしてゐましたの。わたくしはあの方の事についてさつきあなたに濟まない事を云つてしまひましたわ。あなたが招待なすつた位ですから無論あの夫人に悪い處などはありませんわ。世間の事をちやんと心得た、中々

人を惹きつける方ですわねえ。あの方は一度以上結婚した者は非常に厭ひなんですつて、だからアウガスタスの事はもう大丈夫ですわ。どうして世間ではあの人を悪く云ふのでせう。あの厄介なわたくしの姪達——あのサピーユの女どもは始終人の悪口を云つてゐるんですからね。でもわたくしならば矢張りハンブルグへ行きますわ、わたくしほんたうに行きますわ。あの夫人は魔力があり過ぎるやうですから、だがアガーサは何處へ行つたんだらう？ おや、あそこにある。

(アガーサとホパーとが見晴し左、奥、端から登場)

ホパーさん、わたくしは随分怒つて居りますよ。あなたはアガーサを見晴しへ連れ出しておしまひなすつたのね。あの子はほんたうに繊弱いのですのに。

ホパー (左、中の位置) いや、何とも申譯がございません。私達は一寸あちらへ行つて、それから一緒に話をしてゐたのでございます。

バアリック公爵夫人 (中の位置) またアウストラリアの事でせうね？

ホパー はい、ざやうです。

バアリック公爵夫人 アガーサや！ (娘を招く)

アガーサ嬢 はい！

バアリック公爵夫人 (傍白) ホパーさんは何か改まつておつしやつたかい。

アガーサ嬢 はい。

バアリック公爵夫人 さうしてお前はどんな返事をしたの？

アガーサ嬢 はい。

バアリック公爵夫人 (愛撫するやうに) ねえ、お前、お前はいつも間違つたことを云ひはしないねえ。

ホパーさん！ ジェームス！ アガーサがすっかりわたくしに打ち明けてしまひましたわ。あなた方はうまく隠していらつしやいましたのね。

ホパー 奥さん、それではあなたは私がアガーサさんをアウストラリアへ連れて行つてもよろしうございますか。

バアリック公爵夫人 (腹立たしげに) アウストラリアへ？ あんな怖ろしい、下等な土地の事はおつしやらないで下さいまし。

ホパー でもアガーサさんは一緒に行きたいとおつしやいました。

バアリック公爵夫人 (怖い顔をして) アガーサや、お前はそんな事を云ひましたかい。

アガーサ嬢 はい。

バアリック公爵夫人 アガーサ、お前は何といふ馬鹿な事を云ふのでせう。グロスブナ・スクエアの方がまだしも住むにはいい處だよ。あそこにも随分下等な人達が住んでゐるけれど、でも怖ろしいカンガルーなんかは匍ひ廻つてゐやあしないわ。まあ、そんな事は明日ゆつくり話させう。ジェームス。アガーサと一緒に歸りなすつてもよろございます。あなたは勿論わたくしの宅へお晝においで下さ

るでせうね。二時ではいけませんよ、一時でございますよ。公爵があなたにお話があるらしいでございますから。

ホパー 奥さん、私も公爵にお話が致したいのでございますが、公爵はまだ私に一言もお話し下すつたことはございません。

バアリック公爵夫人 明日はきつとあなたにいろいろお話があるだらうと存じますわ。(アガーサ、ホパーと共に退場)では、マーガレットさん、今晚はこれで失禮いたします。古くさいお話でございますが、一目惚れの戀よりも、シーズンの終りに氣心を知り合つてする戀の方が、尙更思ふ通りに參るものでございますわね。

ウキンダミーヤ夫人 奥さん、お休みなさいまし。

(バアリック公爵夫人は、ベースレー卿の腕に倚つて退場)

プリムデール夫人 お宅の御主人は何といふ綺麗な方とダンスをしていらつしやるのでせう！ わたくしがあなただつたら、ほんとうに氣がもめますわ！ あのお方はあなたの御親友でいらつしやるの。

ウキンダミーヤ夫人 どう致しまして！

プリムデール夫人 まあ、さうなの、ではお休みなさいまし。(ダンビイを見ながら退場)

ダンビイ あのホパーといふ男は大變な人間ですな。

58 セシル・グレーム いや、ホパーは野生の紳士です。僕の知つてゐる最も悪い紳士のタイプだ。

ダンビイ ウキンダミーヤ夫人は賢明な夫人だ。大概の夫人ならアーリン夫人を拒絶するだらうに。然しウキンダミーヤ夫人は常識といふ頗る變つたものを持つてゐられる。

セシル・グレーム さうしてウキンダミーヤは無分別ほど無邪氣に見えるものはないと云ふことを知つてゐるんだな。

ダンビイ うん、ウキンダミーヤも大分近代的になりかかつてゐるぞ。あの男がああなるとは思ひがけない。(ウキンダミーヤ夫人に會釋して退場)

ジエツトバラ夫人 奥さん、お休みなさい。アーリン夫人は何といふ氣持のいい方でせう。あの方は木曜日にわたくしの宅へいらつしやいますの。あなたもいらつしやいませんか。きつと僧正やアーリン夫人もお見えになりますわ。

ウキンダミーヤ夫人 残念でございますが、わたくし約束がございますの。

ジエツトバラ夫人 ほんたうに残念でございますわね。さあまゐりませう。

(ジエツトバラ夫人と、グレーム嬢退場)

(アーリン夫人とウキンダミーヤ卿登場)

アーリン夫人 面白い舞踏會でございましたこと。何だかいろいろ昔の事を思ひ出しますわ。(ソファに腰をかける)だけど、世間には何時も相變らず馬鹿な人達が居りますのね。世間はちつとも變らなけれど、マーガレットだけは例外ですわね。あの子はほんたうに美しい子になりました。わたくし

があの子を最後に見た時は——もう二十年も昔でございました。あの子はまだ赤ん坊でフランネルの中に包まれてゐました。ほんの赤ん坊でございましたの。それからあの公爵夫人にあの可愛らしいアガーサさん！ あれはわたくしの大好きな令嬢のタイプでございます。ねえ、ウキンドミーヤさん、もしわたくしがあの公爵夫人の義理の姉になるやうでしたら——

ウキンドミーヤ卿 (アーリン夫人のある左に腰をかける) ですが、あなたはほんたうに？——

(セシル・グレイムは、他の客と共に退場。ウキンドミーヤ夫人は、嘲りと苦痛の目附でアーリン夫人と夫の様子を注意してゐる。二人は彼女のゐるのに気がつかないでゐる)

アーリン夫人 明日の十二時にいらつしやる筈でございます。今夜結婚の申し込みをしたがついていらつしやいましたの、いいえ實は申し込みをなさいましたのよ。あの方はその事ばかり繰り返していらつしやいましたのよ。あなたはアウガスタスがどんなにくどくどと、あの話をしたか御存じてせう。ほんたうに悪い癖ですわ。けれどわたくしは明日にならなければ、返事が出来ないと申しました。勿論わたくしはあの人と一緒にならうと思つて居りますわ。わたくしは立派な妻になつて見せます、世間の妻として通るやうに。アウガスタスさんには大變いい處がございます。幸ひにもそのいい處は凡べて表に出て居りますわ。一體いい處と云ふものは皆表に出てゐるものでございますからね。この事に就いては勿論あなたにも御助力を願はなければなりません。

60 ウキンドミーヤ卿 私にはアウガスタスさんを勵ます義務はないだらうと思ひますが？

アーリン夫人 さうですとも、それはわたくしが勵まして上げます。ですがあなたは氣の利いた計らひをして下さいませうね。

ウキンドミーヤ卿 (澁面をして) それが今晚私に話し度いと云つた事なのですわ？

アーリン夫人 さうですわ。

ウキンドミーヤ卿 (じれつたさうな身振りをして) 其の話は此處では致しますまい。

アーリン夫人 (笑ひながら) では其の話は見晴して申し上げませう。用談をするにだつて綺麗な背景がなくてはなりませんからね。ねえ、さうでせう？ ウキンドミーヤさん、適當な背景さへあれば女と云ふ者は何だつて出来る者ですわ。

ウキンドミーヤ卿 明日ではいけないでせうか。

アーリン夫人 いいえ、わたくしは明日あの人申し込みを受けるつもりでございますの。わたくしに財産があるとあの人に云ふ事が出来たら、大變都合だと思ひますわ。さあ、何と云つたものでせう？——例へばは、と、ことか、また二度目の夫とか、でなければ遠い親戚の人から二千ポンドづつの仕送りがあるといふやうな事でもね。さうしたら尙更あの人を動かすだらうと思ひますわ。ねえさうでございませう？ わたくしの御機嫌をとるには大變都合のいい時ですわ。だけどあなたはお世辭をおつしやるのがお下手でございませうことね。きつとマーガレットがさういふよい習慣をあなたにすめないんでせうね。それは大變な間違ひですわ。人間が愉快な事を云はなくなれば、愉快な事も考へ

ないやうになるのです。それはさうと眞面目なお話ですが、二千ポンドではどんなものでせう？ それども二千五百ポンドでせうか。當節ははしたのお金が大切でございますからね。ウキンダミーヤさん、あなたは世の中といふものを非常に面白いところだとはお考へになりませんか？ わたくしはさう思ひますわ！

(アーリン夫人ウキンダミーヤ卿と共に退場。舞蹈室で音楽が鳴り始める)

ウキンダミーヤ夫人 もう此の家にはある譯には行かないわ。わたくしの愛してゐる人が、今夜わたくしに、その全生命を捧げると云つたのに、わたくしはそれをことわつてしまつた。わたくしは何故あんな馬鹿な事をしたのだらう。わたくしは今こそあの人になんか生命を捧げてしまふわ。生命を捧げて、あの人の所へ行つてしまふ方がいいわ！(外套を着て扉口へ行く。それから又歸つて来る。テーブルの側に腰をかけて手紙を認め、それを封筒に入れて机の上に置く)アーサーは決してわたくしを理解してはゐないのだ。だけどこれを讀んだらきつとあの人にも気がつくだらう。あの方はあの人で自分の好きな生活をするがいい。わたくしはわたくしで自分がいいと思ふ通りに、正しいと思ふ通りにやるんだわ。結婚の誓を破つたのはあの人だわ——わたくしではないわ。わたくしは唯其の絆を破るだけなんだわ。

(退場)

(パーカー左より登場。舞蹈室右の方へ行く、アーリン夫人登場)

アーリン夫人 ウキンダミーヤの奥さんは舞蹈室にいらつしやいますの？

パーカー 奥様はたつた今お出ましになりました。

アーリン夫人 お出ましになつて？ 見晴しにでもいらつしやるんぢやないの？

パーカー いいえ、奥様はたつた今お屋敷からお出掛けになりました。

アーリン夫人 (立ち上つて不思議さうにパーカーの顔を見る) お屋敷から？

パーカー はい、奥様は殿様へあてたお手紙をテーブルの上に残して置いたとおつしやいました。

アーリン夫人 ウキンダミーヤさんに置手紙をなすつたのですつて？

パーカー さやうでございます。

アーリン夫人 ああさう、どうもお世話さま。(パーカー退場。舞蹈室の音楽やむ) 家出をした！ 置手紙をした！(その側に行つて手紙を見る。一寸手に取つて見てぎよつとして再び手紙を置く) いえい

え！ そんな事がある譯はない。あんな悲劇が世の中に度々起る譯がないわ！ ああ何だつてこんな恐ろしい想像がわたくしの胸に浮んで来るのだらう、忘れよう、忘れよう、思つてゐたのに、どうしてわたくしはあの時の事を今頃思ひ出したのだらう？ 本當にあんな悲劇が世の中に度々あるものだらうか？(手紙の封をさいて中をよむ。氣がもめてたまらないやうに椅子に腰を落とす) ああ何といふ恐ろしい事だらう！ 二十年前にわたくしがあの子の父親に書いた手紙と同じ文句だ！ あの手紙を書いた爲に、わたくしはこれまでどんなにつらい報いを受けただらう！ いやいやあれはまだ報

いではなかつたのだ。本當の報いを今夜になつて受けたのだ！（まだ右に腰かけてゐる）

（ウギンダミーヤ卿。左、奥、端に登場）

ウギンダミーヤ卿 あなたは私の妻に暇乞ひをなさいましたか。（中に来る）

アーリン夫人 （手紙を手の中にまるめながら）はい申し上げました。

ウギンダミーヤ卿 あれは何處に居りませうか？

アーリン夫人 大變疲れたとおつしやつて、今しがたお休みになりましたわ。頭痛がなさるつておつしやつていらつしやいました。

ウギンダミーヤ卿 では行つてまゐりませう。御免下さい。

アーリン夫人 （急いで立ち上る）いいえ！ いいえ御心配なさる程の事ぢやございませんの。唯大變に疲れていらつしやいますの。それにまだお客様が食堂においでなさいますので、どうぞあなたから申し譯を下さいとおつしやいましたが。どなたも来て下さらないやうに、静かにしてお休みなさりたいんですつて。（手紙を落とす）わたくしは奥さまからあなたに言傳をたのまれましたの。

ウギンダミーヤ卿 （手紙を拾ひ取り）あなたお手紙をお落しになりましたよ。

アーリン夫人 ああ、ありがたう。わたくしが落したんでございます。（手紙を受取らうとして手を差し出す）

64 ウギンダミーヤ卿 （未だ手紙を見つめながら）ですが、これはうちの妻の手ではございませんか？

アーリン夫人 （急いで手紙を取る）ええ、それは——宛名でございますの、どうぞわたくしの馬車を呼びにやつて下さいませんか。

ウギンダミーヤ卿 かしこまりました。（左に行き退場）

アーリン夫人 まあよかつた！ どうしたらいいだらう。どうしたらいいだらう。今までには覺えのない事なのに、わたくしには情愛が起つて來た。一體どうした譯だらう？ あの子にあれの母親のやうな眞似はさせられない——ほんたうに恐ろしい事だ。どうして助けたらいいだらう。どうしてあの子を助けたらいいだらう。この一刻が一生を過るのだ。わたくしこそ誰よりよく知つてゐる！ ウギンダミーヤを何處かへ出してしまはなけや、それが何よりかんじんな事だ。（左へ行く）けれども、わたくしどうしたらいいだらう？ まあ、どうかしてやつてのけなくちや。ああ！

（アウガスタス卿花束を持ちながら、右、奥、端へ登場）

アウガスタス卿 もしあなた私は氣がもめてたまりません。未だ御返事を聞かせては頂けませんか？

アーリン夫人 アウガスタスさん、まあお聞きなすつて下さい。あなたウギンダミーヤさんを直ぐに俱樂部へ連れて行つて、出来るだけ長くあそこにとめて置いて下さいました。ね、ようござんすか。アウガスタス卿 ですが、あなたは夜は早くきり上げるやうにおつしやつたぢやありませんか。

アーリン夫人 （興奮して）わたくしの云ふやうになすつて下さい。わたくしの云ふやうになすつてく

アウガスタス卿 さうすればお禮がいただけますかな？
 アーリン夫人 お禮ですつて？ お禮ですつて？ まあ！ それは明日になさいまし。然しウキンダミ
 ーヤさんを今夜見失つてはいけませんよ。そんな事があるとわたくしはあなたを許しません。もう二
 度と再びあなたに口を利きません。もうあなたとは一切關係を無くしますわ。ウキンダミヤを倶楽
 部へ止めて置いて今晚うちへ歸さないやうになさるんですよ。氣をつけて下さいましよ。(左より退
 場)

アウガスタス卿 うん。もう亭主になつたも同然だ。しめたわい。

(ぼかんとして、アーリン夫人について行く)

第三幕

場面——ダーリントン卿の居室。煖爐右の前には大きなソファが置いてある。舞臺の後手に當
 つて窓にはカーテンが曳いてある。扉左、同じく右、ペンヤ、インキが載せてあるテーブル右、
 サイホンとコップと、タンタラス、フレームが載せてあるテーブル中、葉巻と巻煙草が載せてあ
 るテーブル左、洋燈が點いてゐる。

66 ウキンダミヤ夫人 (煖爐の前に立つて) 何故あの方はいらつしやらないだらう？ この待つ間の怖

ろしいこと。いらつしやらなければならぬのだが。どうしていらつしやらないのだらう。熱烈な事
 をおつしやつて、燃えるやうな思をさせて下さるのだから。寒氣がすること——戀も何も知らない人
 のやうに。寒氣がする。わたくしは何だか寒くなつて来た。戀も何も知らない人間のやうに寒氣がす
 る。もうアーサーはあの手紙を讀んだに違ひない。わたくしのことを何とか思つてくれるなら、追つ
 かけて来て、無理にもわたくしを連れて歸る筈なのに、彼の人は何とも思つてはゐらないんだ。彼の人は
 はずつかりあの女の手管に乘せられてゐる。いいやうにされてゐるのだ。男を自由にしようと思へば
 ただ男の弱點にさへ附入れればいい。わたくし達は男を神のやうに立派にしようとする。だから男はぢ
 きわたくし達を見捨ててしまふのだ。他の女共は男を動物のやうに賤しいものにする。だからいつま
 でも男は側を離れないのだ。なんて怖ろしい世間だらう。おお、こんな處へ来たのは狂氣の沙汰だつ
 た。空恐ろしい狂氣の沙汰だつた。愛してくれる男の玩具になるのと、女の名譽を穢す男の妻とな
 るのとどちらが悪い事だらう？ どんな女にその事がわかるだらう？ 世界中のどんな女に？ だが
 彼の人は始終わたくしを愛してくれるだらうか？ わたくしは彼の人に生命までも捧げてしまはうと
 してゐる。だけどわたくしは彼の人に何を持つて来て上げたらうか。歡びの調しらべを忘れた唇、涙に盲い
 た眼、冷めたい手、氷のやうに冷たい心——わたくしは何も持つて来ては上げなかつた。わたくしは
 歸らなけりやならない。いいえ、わたくしは歸る事は出来ない。あの手紙のお蔭でどうにも動きがづ
 なくなつてしまつた。アーサーはわたくしを許しはしなからう。悪い手紙だつた！ いいえ、ダー

リントンさんは明日英國をお立ちになる。わたくしも一緒に行かう。——それより外に道はないのだ。(一寸の間坐つてゐて、また立ち上つて、上着を着る) いや、いや、わたくしは歸らう、アーサーはどうしてもするがいい。わたくしは此處にかうしてはゐられない。此處へ来たのは狂氣の沙汰だつた。すぐ歸らなけりやならない。おや、ダーリントンさんがおいでになつたらしい。どうしたらいいだらう。何と言つたものだらう。わたくしを歸らしてくれるだらうか。男は殘酷なもの、恐ろしいものと聞いてゐる。おや。(手で顔を隠す)

(アーリン夫人左より入り来る)

アーリン夫人 ウィンダミーヤの奥さん。(ウィンダミーヤ夫人は驚いて見上げ、輕蔑して身をすくめる) 間にあつてまあよかつたこと！ あなたはすぐこれから旦那様の處へお歸りにならなければなりません。

ウィンダミーヤ夫人 どうしても？

アーリン夫人(命令的に) さうですとも。一寸でも猶豫はなりませんよ。今にもダーリントンさんのおいでになるかもしれません。

ウィンダミーヤ夫人 わたくしのそばへいらつしやつてはいけません。

アーリン夫人 まあ、あなたはもう一步で破滅の底に落ちてしまひます。恐ろしい絶壁の縁に立つていらつしやるのです。すぐ此處をお退きなさい。わたくしの馬車が外に待たせてあります。わたくしと

一緒においでなさいまし。眞直にお宅へお歸りなさらなければいけません。(上着を脱いで、ソープアの上に投げかける) 何をなすつていらつしやいますの。

ウィンダミーヤ夫人 あなたが此處へいらつしやらなければわたくしは宅へ歸つたでせうに。けれどあなたにお目にかかつた上は、もうどうあつてもウィンダミーヤの處へは歸られません。あなたは随分無鐵砲な事をなさるんですね。何だか無暗に腹が立ちますわ、あなたが此處へいらつした理由もよく分つてゐます。夫があなたを此處によこしたのは、わたくしをだまして連れ戻すためです。わたくしをあなたと夫との關係を包む目隠しにしようと云ふのです。

アーリン夫人 そんな事があるものでせうか。

ウィンダミーヤ夫人 わたくしの夫の處へお歸り下さい。アーリンさん、彼の人はあなたのものです。わたくしのものではありません。彼の人は世間の誹謗を恐れてゐるのです。男と云ふものはそんなに臆病なのです。世間の法律を犯して置きながら人の口を恐れてゐるのです。夫は覺悟した方がいいでせうよ。どうしたつて誹謗は受けなければなりませんからね。ロンドン中の大評判になつていい物笑ひになるのです。惡徳新聞には書き立てられる。わたくしの名が貼紙に出る。

アーリン夫人 いえ——いえ——

ウィンダミーヤ夫人 さうですとも。ウィンダミーヤが迎へに来てくれたら、わたくしはあなたとウィンダミーヤが仕組んで置いた自墮落な家庭へ戻つて行つたでせう——戻つて行くつもりでした。だけ

れどウキンダミーヤが家にゐてあなたを迎へによこすなんて——まあ！ 何と云ふ不埒な事だせう。不埒ですわ。

アーリン夫人 (中) ウキンダミーヤの奥さん、あなたは大變わたくしを恥しめると云ふものです。御主人を大變恥しめると云ふものです。彼の方はあなたが此處にいらつしやるのを御存じないのです。おうちにいらつしやるものと思つていらつしやるのです、あなたが御自分の部屋でお休みになつていらつしやるものと。あなたのお手紙は讀んではいらつしやらないのです——あの無分別なお手紙は。ウキンダミーヤ夫人 (右) 讀んでゐないのですつて！

アーリン夫人 ええ、ちつとも御承知ないのです。

ウキンダミーヤ夫人 随分わたくしを甘く見ていらつしやるわ。(アーリン夫人の方へ行き) あなたは嘘をついていらつしやるのですね！

アーリン夫人 (自分を制しながら) 嘘ではございません。ほんたうの事を申し上げてゐるのですわ。ウキンダミーヤ夫人 夫がわたくしの手紙を讀まないのでしたら、どうしてあなたが此處へおいでになつたのでせう。わたくしが家を捨てたことを、あなたが厚かましく出入りをなさる家を捨てたことを、誰方からお聞きになつて？ 夫からでせう。わたくしをつれ戻しに夫があなたをよこしたのでせう。(左を横ぎる)

アーリン夫人 (右、中) 御主人はあなたのお手紙を決してごらんにはなりません——わたくしが開け

て見たのです。わたくしが——讀んだのです。

ウキンダミーヤ夫人 (アーリンのはうを向いて) わたくしの手紙を開けてごらんになつたのですつて。まさか！

アーリン夫人 まさかですつて！ まあ！ あなたを破滅の淵から救ひ出さうためなら、どんな事だつて致しますわ。お手紙は此處にございます。御主人は決してごらんにならないのです。どうしてお見せ申すことが出来ませう。(煖爐のそばへ行き) こんなものはお書きなさる筈はなかつたのです。(手紙を破つて火に投げる)

ウキンダミーヤ夫人 (聲と態度に非常な輕蔑を含めて) 其の手紙がわたくしのだかどうだか分つたものぢやありませんわ。そんな甘い手でわたくしがだませると思召して？

アーリン夫人 どうして、わたくしの申すことをさうお疑ひなさるのでせう？ わたくしがどう云ふ目的でこちらへ上つたと思つていらつしやいますの？ とり返へしのつかない破滅からあなたを救ひ出さう。怖ろしい勘違ひからあなたをお救ひしようと思ふばかりにまゐつたのでございますよ。いま燃した手紙はあなたのお手紙でございます。わたくしはあなたにお誓ひ致します！

ウキンダミーヤ夫人 (ゆつくりと) わたくしに見せて下さらないで、燃しておしまひなさるなんて、まあまくたくらんだものですわね。わたくしにはあなたが信じられません。あなたの全生涯は偽りです。一つだつてあなたに本當がおつしやられるものですか？ (坐る)

アーリン夫人 (あせつて) どうなりとお勝手にお考へなさいまし。どうなりとお好きなやうに悪口をおつしやいませ。ですが兎に角、お歸りなさいまし。あなたの愛していらつしやる御主人のところへ。

ウキンドミヤ夫人 (澁々顔で) わたくしは夫を愛して居りません!

アーリン夫人 あなたは愛していらつしやる。あの方だつてあなたを愛していらつしやる。それはあなただつてよく御承知でせう。

ウキンドミヤ夫人 夫は愛と云ふことを知りません。ちやうどあなたと同じやうに愛と云ふことを御存じないので。あなたの御注文はちやんと心得て居りますわ。わたくしを連れ戻せばさぞお役に立つこととございませうよ。まあ! 歸つたらどんな羽目になることとせうね! 慈悲も情も知らない女、見るさへ穢らはしい、口をきくさへ忌はしい女、自墮落な女、人の夫を誘惑するやうな女のためによいやうにされるのです。

アーリン夫人 (當惑の表情をもつて) ウキンドミヤさん、ウキンドミヤさん、そんな怖ろしいことはおつしやいますな。どんなに怖ろしい事だか、どんなに怖ろしい、どんなに不正なことだか、あなたにはお分りがないのです。まあ黙つてわたくしの申すことをお聞きなさいまし。御主人の處へお歸りになりさへすればいいのです。さうなされば、この末たとへどんな事があらうとも、わたくしはあなたの御主人とはおつき合ひは致しますまい、あなた方のお邪魔はきつと致しますまい。成る程わ

たくしはあなたの御主人からお金はいただきました。ですがそのお金は愛のためではございません。尊敬の爲でもございません。お憎しみから下さつたのです。わたくしを恥かしめようと云ふので下さつたのです。御主人をいいやうにする――

ウキンドミヤ夫人 (立ち上り) それごらんない。いいやうにすると白状していらつしやる!

アーリン夫人 さやうでございませう。ではその譯をお話いたします。わたくしにお金を下さつたのは御主人があなたを愛していらつしやるからです。ウキンドミヤさん。

ウキンドミヤ夫人 さう思ひ込ませるお積りなの。

アーリン夫人 それを信じて頂かなければなりません! ほんたうなのでございますから。さうなすつたのもあなたを愛していらつしやるからです。さあ、何とでもお好きなやうにおつしやいませ、壓制とでも、脅迫とでも、何とでも。ですがあなたを愛するからこそあのやうになすつたのです。あなたを恥辱と不名譽から救はうとしていらつしやるからです。

ウキンドミヤ夫人 何とおつしやるのです? まあ失禮な! あなたなんかのお構ひなさることではないのです。

アーリン夫人 (卑下して) さうですとも、それはよく存じて居ります。ですが御主人はあなたを愛していらつしやるのです。さう云ふ愛情は二度と得られるものではありません。斷じてまたとはない愛情でございます。それをお捨てになつては、冥加が盡きてしまひますよ。さう云ふ愛情は二度とあな

たには恵まれません。どんなに願つても恵まれません。アーサーはあなたを愛していらつしやいますよ。

ウキンダミーヤ夫人　アーサー？　そんな呼び方をなすつて、それでもあなたはやましい事がないとおつしやるのですが。

アーリン夫人　ウキンダミーヤさん、御主人はあなたに對して何も罪を犯して居りません、神かけてお誓ひいたします。さういふ誤解があなたのお胸に湧き上ると氣がついたら、あなたのお邪魔をすることで、わたくしはいつそ死んでしまひます。喜んで死んでしまひます。（ソファ右へ進む）

ウキンダミーヤ夫人　あなたは情愛を知つた人のやうに話をなさることね。あなたのやうな女に情があるものですか。情なんぞがあなたにあるものですか。あなたは買はれて賣られるのです。（左、中に坐る）

アーリン夫人　（苦しげに身を動かす、さうして自分を制する。さうしてウキンダミーヤ夫人に近づく、話しかけて夫人の方へ手をさし出す、併し夫人には觸れない）何とでもお好きなやうにお思ひなさい、わたくしはちつとでも憫れんでいただけの身分ではございません。けれどもわたくしの爲に、あなたの綺麗な若々しい御生涯を滅茶滅茶になすつてはなりません。すぐとこれから、おうちへお歸りなさらなければ、どんな不幸が、此の末あなたの身にふりかかつてくることか、御存じないので

す。墮落のどん底へおちて人から卑しめられたり、嘲られたり、見捨てられたり、後指を差されたりする——さうしてロクでなしになつて、世間は相手にしてくれず、今にも假面を剥ぎ取られはしないかと氣遣つて、恐ろしい横道へさうとつくと匍ひ込んで行く、その間も恐ろしい世間の笑聲を聞いて、涙にまさる思ひをするやうな身の上になつたら、まあどんな心持でせうか、あなたはそれを御存じないのですわね。あなたは全く御存じないのですわね。犯した罪の酬いは受けなければなりません。一生涯罪の酬いをうけなければなりません。そんな事をあなたは全く御存じないのですわね。苦しんで罪が消えるものならば、今頃はもうとつとくにわたくしの罪は消えた筈ではございませんか、それがどんな恐ろしい罪だつたにしても。今夜あなたは心のないものに心を授けて下さいました。授けておいてまたその心を破つてはわたくしを苦しませていらつしやるのです。だがそんな事はどうでもようございませす、わたくしは自分の生涯を誤つても、あなたの生涯は破壊させないつもりです。あなた、まあ、あなたはまだほんのお嬢さんです。取り返しのつかない事になつてしまひますよ。あなたは御自分のお力では安全な處へお着きになれない方でございます。智慧も勇氣も、あなたは持つていらつしやらない。恥辱を忍ぶことは出来ないのです。いえ！　お歸りなさいまし、ウキンダミーヤさん。お歸り遊ばせ。あなたを愛する夫の許へ。あなたにはお子さんがおあります。ウキンダミーヤさん。お子さんの處へお歸り遊ばせ。今だつて、泣いたり笑つたりしてあなたを呼んでいらつしやるのです。（ウキンダミーヤ夫人立ち上る）神さまはあなたにあのお子さんをお恵み下

さつたのですよ。あなたにはお子さんの生涯を立派なものになさる義務があります。お子さんの生涯を守つて上げなければなりません。お子さんの生涯があなたのお間違ひから破滅になりでもしようものなら、あなたは一體何と神様にお答へなさるお積りでせうか。お家へお歸りなさいまし。ウキンダミーヤさん。——あなたの夫はあなたを愛していらつしやいます。ただの一度だつて、あなたを愛する道からはづれた事はありませんでした。よしんば夫に千人の戀人があつたにしても、あなたはお子さんのそばにいらつしやらなければなりません。夫がどんなにあなたを酷くなすつても、あなたはあなたのお子さんの傍にいらつしやらなければなりません。たとへ夫があなたを見捨てても、あなたにいらつしやるべき所はあなたのお子さんの傍ですよ。

(ウキンダミーヤ夫人は、涙がこみ上げて手を以て顔を掩ふ。アーリン夫人はウキンダミーヤ夫人の方へ走り寄つて)

ウキンダミーヤの奥さん!

ウキンダミーヤ夫人 (アーリン夫人の方へ手を差し伸べ、子供がするやうに力無げな形をして) わたくしを連れて歸つて下さいまし。わたくしを連れて歸つて下さいまし。

アーリン夫人 (ウキンダミーヤ夫人を掻き抱きさうにする。さうして、それから自らを制する。顔には非常に喜ばしさうな表情が浮ぶ) さあいらつしやいます。あなたの上着はどちらにございましたか。(ソーフアからそれを取り上げ) これをお召し遊ばせ。さあ参りませう。

(兩人は戸口へ進む)

ウキンダミーヤ夫人 お待ちなさい。人聲がしは致しませんか。

アーリン夫人 いえ、いえ、誰も來はしません。

ウキンダミーヤ夫人 いえ、いえ、誰か來ましたわ。ね、お聴きなさいまし! おや! 夫の聲でございますよ、此方へ参りさうでございますよ。助けて下さい。あ! たくらんでいらつしやるのね。あなたがお呼びになつたのですね。

(外にて人聲がする)

アーリン夫人 しつ! わたくしはお助けする爲に來たのですよ、出来る事なら。しかし、もうお仕舞ひです! ごらんなさい。(窓のカーテンを指す) おくれなさい。この機会を逸しては大變ですよ! 早く!

ウキンダミーヤ夫人 だが、あなたは?

アーリン夫人 いえ、わたくしはよろしうございます。わたくしは皆さんに逢ひます。

(ウキンダミーヤ夫人、カーテンの後にかくれる)

アウガスタス卿 (外で) 常談ぢやない。ウキンダミーヤ、君は歸つちやいかんよ!

アーリン夫人 アウガスタスさんだ。そんなら困るのはわたくしだけわ。

(ちよつとの間躊躇する。さてあたりを見廻し、扉右口を見て、そこから外へ出る)

(ダーリントン、ダンビイ、ウキンダミーヤ卿、アウガスタス・ロオトン、セシル・グレアムの五人登場)

ダンビイ　こんな時刻に、クラブから俺達を逐ひ出すなんて、迷惑千萬だ！　まだやつと二時だ。(椅子に坐り)夜の華やかな時間はこれからと云ふところだ。(欠伸をして目を閉ぢる)

ウキンダミーヤ卿　ダーリントンさん。アウガスタスの望み通りに、お宅へ邪魔出来るのは結構だが、私はゆつくりしてはゐられないのでね。

ダーリントン卿　おや、それや残念だ。まあシガアでもいかがです。

ウインダミーヤ卿　ありがたう。(坐る)

アウガスタス卿　(ウキンダミーヤ卿に向ひ)おい君、歸るなんてことがあるもんかね。大事な用件がどつさりあるんだぜ。(左テーブルに向つてウキンダミーヤ卿と一緒に坐る)

セシル・グレアム　あ、分つてゐるよ。皆心得てゐるよ。タッピーはアーリン夫人のことばかり云つてゐる。

ウキンダミーヤ卿　だが君の知つた事ぢやないだらう。え、セシル君。

セシル・グレアム　さうとも。それだから面白いんだよ。僕は自分の仕事となると退屈とても我慢は出来ないよ。僕は人の事でおせつかいがしたいんだ。

78　ダーリントン卿　何かやりますかね。君達。セシル君、君はウキスキイソーダがよささうだね。

セシル・グレアム　結構(ダーリントン卿と一緒にテーブルの方へ行く)アーリン夫人は素敵に綺麗に見えたぢやないか。

ダーリントン卿　僕はアーリン夫人黨の一人ぢやないからなあ。

セシル・グレアム　以前は僕もさうぢやなかつた。が、今では僕もさうなのだ。あの女はたうとう僕を説き伏せてカローリンの叔母に紹介させたほどだからね。今頃は叔母さんの處へ御馳走に行つてゐることだらうよ。

ダーリントン卿　(びつくりして)まさか？

セシル・グレアム　なあに本當だとも、叔母さんのところへ行つてゐるんだよ。

ダーリントン卿　一寸失敬するよ。僕はあした出發するつもりだからね。五六本手紙を書かなければならないんだ。(卓の傍に坐る)

ダンビイ　賢い女だ。アーリン夫人は。

セシル・グレアム　おい、ダンビイ！　君は寝てゐるのかと思つた。

ダンビイ　うむ、寝てゐるのさ。僕は常に寝てゐるのさ！

アウガスタス卿　素敵に利口な女だ。何しろ己の馬鹿をよく御承知だからね、ちやうど僕が自分自身で知つてゐるほどよく知つてゐる。

(セシル・グレアムは笑ひながらアウガスタスの方へ歩みより)

まあ君達は笑ふかも知れないが、本當に自分を理解してくれる女に逢ふと云ふ事は稀なことだよ。

ダンビイ 恐ろしく危険な事だよ。遂ひには其の女と結婚するやうな事になるからね。

セシル・グレイム ダンビイ、君はもう二度とアーリン夫人には逢はないのかと思つた。さう、さう、君は昨夜俱樂部でさう云つたぢやないか。君は聞いたと云つたつけね——（小聲になつてアウガスタスに囁く）

アウガスタス卿 うむ、さう云つたよ。

セシル・グレイム それからウイスバアデンの話は？

アウガスタス卿 その事も話したよ。

ダンビイ それから、彼の女の収入のことも？ タツピイ、それも話したかい。

アウガスタス卿 （眞面目な聲になつて）彼の女は明日その事を話す筈だよ。（セシル・グレイム中、テーブルに歸る）

ダンビイ 馬鹿に商賣じみてるな近頃の女は。我々の祖母さんは捨鉢になつて身をまかしたものが、

その祖母さんの孫娘達は、何か身のためになる事がなければ捨鉢にはならないからなあ。

アウガスタス卿 君はあの女を悪い女にしたいのだね。悪い女ぢやないよ。

80 セシル・グレイム 悪い女は人を迷惑させる。善い女は人を退屈させる。彼等の相違はただそれくらいのものさ。

アウガスタス卿 （シガアを吹かしながら）アーリン夫人には未來があるよ。

ダンビイ アーリン夫人には過去があるさ。

アウガスタス卿 僕は過去のある女が大好きだ。話をしても第一面白いよ。

セシル・グレイム あの女とならばさぞ君は澤山に話があるだらうよ。（立ち上つてアウガスタスの方へ行く）

アウガスタス卿 君は冷やかすつもりか、冷やかすつもりかい。

セシル・グレイム （アウガスタスの肩へ手をやる）なあ、タツピイ、君は面目も名譽も失つてしまつたんだぜ、しかし腹を立ててはいかん——

アウガスタス卿 おい君、僕が若しもロンドンで第一のお人好しでなかつたら——

セシル・グレイム 僕達のもつと君を尊敬すべき筈だ。さうぢやなからうか、君。（ずんずん歩いて行く）

ダンビイ 近頃の青年は全く奇怪だね。ちつとも白髪頭を尊敬しないんだからな。（アウガスタス腹立たしげに四邊を見渡す）

セシル・グレイム アーリン夫人はタツピイを非常に尊敬してゐるよ。

ダンビイ それからね、アーリン夫人はほかの女に對していい模範を示すものだね。近頃の女は、一體夫でない男には手ひどく残酷を極めてゐる。

ウキンダミーヤ卿　ダンビイ、君はをかした人間だね。セシル、君もその舌を始末したまへ。アーリン夫人のことは放つておき給へ。君はあの女のことなんかちつとも知りはない癖に、何時でもあの女をこき下してゐる。

セシル・グレーム　（左、中なるウキンダミーヤの方へ進み行き）おい、アーサー、私は決して悪口は云はない。僕はただお喋りをするだけなのだ。

ウキンダミーヤ卿　悪口とおしゃべりとはどう違ふね。

セシル・グレーム　さあ、おしゃべりは愉快だよ！歴史はただおしゃべりだ。悪口はおしゃべりだが教訓がついてゐる。だがね、僕は決して教訓はしないよ。教訓する奴は一般に偽善者だ。さうして教訓する女は一般に不器量だ。ノンコンフォミストの良心を持つてゐる程、女に不釣合ひなものはない。喜ぶべきことには、大抵の女はそれを知つてゐるがね。

アウガスタス卿　君、それには僕も同感だよ。

セシル・グレーム　そいつは困つたな。タツピー。人が賛成してくれる度毎に僕は間違つてゐるやうな氣持がするんだ。

アウガスタス卿　君、私が君達の時代には――

82
セシル・グレーム　しかし、君は我々の時代にはならなかつた。またなる事もあるまい。（中へ進んで）おい、ダーリントン、かるたをしよう。アーサー、君もやらないか。

83
ウキンダミーヤ卿　澤山だよ。セシル。

ダンビイ　（溜息をついて）ああ！結婚しちやあ人間もおしまひだ。結婚はシガレットのやうに人間を不道徳にする。おまけにもつと金がかかる。

セシル・グレーム　かるたは無論やるんだらうな？　タツピー。

アウガスタス卿　（テーブルに近づき自分でブランドイソーダを注ぐ）やれないよ、二度と再び酒を飲んだり、勝負をしたりしないと云ふ事を、アーリン夫人に約束したんだからね。

セシル・グレーム　おいタツピー、正しい道の方へ迷ひ込んで困るぜ。了簡を入れかへさせられると退屈な奴になつちまふからな。そんな事をさせるのが女の最も悪い奴さ。奴等は常に男を善良にしようとしてゐる。ところが折角善良になると、今度逢つても、奴等は我々を愛しはしないのだ。奴等は我々が取返しつかない悪い者になつてゐる事を欲する。さうして我々を面白くも何ともない人間にして、捨ててしまはうとする。

ダーリントン卿　（手紙を書いてゐた右テーブルから立ち上り）さうして奴等は何時でもわれわれをわるいものに見てゐる。

ダンビイ　僕は男と云ふものがさう悪いとは思はない。尤もタツピーだけは別だがね。

扇の人夫ヤーマンキウ
ダーリントン卿　いや、我々は泥溝どろどぼにゐるのだ、しかし或者はそこから天の星を眺めてゐる。（中、テーブルに坐る。）

ダンビイ 我々はみな泥溝にゐるのだ、しかし或るものは其處から天の星を眺めてゐるのだつて？ 君は確に今夜は非常にロマンチックだね、ダーリントン。

セシル・グレイム ロマンチック過ぎるよ。君はラブをしてゐるに違ひない。當の相手の娘は誰だね。ダーリントン卿 僕の愛してゐる女は自由な身でない。或は自分で自由ではないと思つてゐる。(話してゐる間、本能的にウキンダミーヤ卿を眺める)

セシル・グレイム それでは夫のある女だな！ 夫のある女の眞實くらゐ厄介なものはないね！ しかも妻帯した男は少しも御存じのない事なんだ。

ダーリントン卿 その女は僕を少しも愛しはしないよ。その女は善良な婦人だ。その女は私が今まで知つてゐる、たつた一人の善良な婦人だ。

セシル・グレイム 今までに逢つた事のあるたつた一人の善良な婦人だつて？

ダーリントン卿 さうだとも。

セシル・グレイム (シガレットに火をつけながら) それなら、君は果報者さ！ だつて、私は何百人といふ善良な女に逢つた。私は善良な女でないには出會した事はない。世の中は全く善良な婦人で一杯になつてゐる。さう云ふ女を知るのが、中流社會の教育と言ふものだ。

ダーリントン卿 あの女は純潔で、無邪氣だ。あの女はわれわれ男子の失つたものごとく持つてゐる。

セシル・グレイム 君、純潔とか無邪氣とか云ふものが、一體我々男子にとつて何になるのだい。そんなものよりうまく出来上つたボタンの孔の方がずっと有り難味があるぜ。

ダンビイ で、君、その女は實際君を愛してゐないのだね？

ダーリントン卿 うん、愛してゐないのさ。

ダンビイ そいつ結構な事だ、此の世の中には唯二つの悲劇がある、一つは求めてゐる物が得られない事で、もう一つはそれが得られることだ。後の方が一層悪いんだ、それが本當の悲劇なのだ、だが、その婦人が君を愛してゐないと云ふのは面白いね。一體君は自分を愛してゐない婦人を、何時まで愛してゐられるだらうか。ねえ、セシル。

セシル・グレイム 私を愛してゐない婦人を？ と云ふんだね。勿論一生涯さ。

ダンビイ 私もさうなんだ。さういふ女を目附けるのはなかなかむづかしい。

ダーリントン卿 何だつて君はさう自惚れられるんだらうな、ダンビイ。

ダンビイ 自惚れなんてものとは違ふよ。残念な事だと思つて云つたんだ。僕はこれ迄に何時でも熱烈に愛されてゐた。それが残念なのだ。それが厄介極まる事なんだ。折には一人になつて、ほつと息をつきたいんだ。

アウガスタス卿 (まはりを見廻はして) つまり君その間に、自身を教育するんだらう。

ダンビイ いや、其の間覺えた事をみんな忘れるんだ。其の方がもつと重大なんだ。タッピー(アウガ

スタス卿は不安さうに腰かけたままで體をゆする)

ダーリントン卿 君達はなんて皮肉なんだらう!

セシル・グレイム 皮肉屋つてどんなもんだい。(ソファの背に腰かけて)

ダーリントン卿 總てのものの代價は知つてゐるけれども、價値を知らない人なんだ。

セシル・グレイム それからねえ、感傷家と云ふものは、總てのものに途方もない價値を認めるが、一寸したものの相場を知らない人なんだ。

ダーリントン卿 君は面白いねえ、セシル。君は如何にも苦勞人みたいに話をしてゐるね。

セシル・グレイム 僕は苦勞人だもの。(煖爐の前へ進み寄る)

ダーリントン卿 何だ、まだ若い癖に!

セシル・グレイム それが間違ひなんだ。經驗は生活に對して敏感を持つか、持たんかの問題だ。私は敏感をもつてゐる。だがタツピーは持つてゐないんだ。タツピーに云はせると經驗とは自分の過失の事ださうだ。ただそれだけのことさ。(アウガスタスは怒つたやうに四邊を見渡す)

ダンビイ 經驗とは誰でも自分の過失に與へた名前なのさ。

セシル・グレイム (煖爐に背を向けて立ちながら) 然し過失は犯すべきものではない。(ソファに置
いあるウキングミーヤ卿の扇に目をつける)

ダンビイ 過失がなければ人生は極めて退屈になるだらう。

えダーリントン。

セシル・グレイム 勿論君は君の愛してゐるその女に極めて忠實なんだらうね、その善良な女に? ね

ダーリントン卿 セシル、一人の女を本當に愛すれば、世界中の他の女は其の人には絶対に無意味なものになつてしまふ。戀は人を變化させる、私は變化したよ。

セシル・グレイム おや、おや、こいつは面白い、タツピー、私は君に話したい事がある。(アウガスタスはわざと知らぬ振りをする)

ダンビイ タツピーに話しても駄目だ、まるで煉瓦の壁に物を云ふも同然だ。

セシル・グレイム だが、私は煉瓦の壁に話したいんだ。私に反對しないのは煉瓦の壁くらゐなものさ! タツピー!

アウガスタス卿 話? 何だい? (立ち上つて、セシル・グレイムの方へ行く)

セシル・グレイム こつちへ來給へ、君でなくつちやならないんだ。(傍白) ダーリントンは戀愛の純潔などといやに教訓ぶつたことを云つてゐるが、そのくせ自分の部屋へ年中中女を連れ込んでゐるぢやないか。

アウガスタス卿 まさか! まさか!

セシル・グレイム (低聲で) 本當だよ、女の扇があるぢやないか。(扇を指さす)

アウガスタス卿 (クスクス笑ひながら) こいつあ驚いたなあ。

ウキンドミヤ卿 (戸口によりながら) もう私は歸ります。ダーリントンさん。君がこんなに早く英國を立ち去るのは實に残念なことです。またこちらへお歸りになつたらお訪ね下さい。私も妻もお待ちして居ります。

ダーリントン卿 (ウキンドミヤと舞臺の前面へ出て) 幾年もかへつて來られさうもありませんな。さやうなら。

セシル・グレイム アーサー。

ウキンドミヤ卿 何だい？

セシル・グレイム 一寸君に話したい事があるんだ。ちよつと！ 來給へ。

ウキンドミヤ卿 (外套を着ながら) いや、もうさうしてはゐられない。もう歸りますよ。

セシル・グレイム 特にお話したいんだ。非常に君を面白がらせる事なんだ。

ウキンドミヤ卿 (笑ひながら) また例の常談だね。

セシル・グレイム さうぢやない。本當にさうぢやないよ。

アウガスタス卿 (ウキンドミヤの方へ進みより) おい君、まだ歸つちやいけないよ。澤山話したい事があるんだ。セシルは君に見せたいものがあるさうだよ。

ウキンドミヤ卿 (ずつと進み來り) 一體何のことだね。

セシル・グレイム ダーリントンは現に此の自分の部屋に婦人を連れ込んでゐるんだぜ。女の扇がある

ぢやないが。面白いな。(間)

ウキンドミヤ や！(驚いて扇を握む——ダンビイ立ち上る)

セシル・グレイム 何事だね。

ウキンドミヤ卿 ダーリントンさん！

ダーリントン卿 (ふり返りながら) ええ！

ウキンドミヤ卿 妻の扇がどうして此處にあるのです。いいです、離して下さい。

ダーリントン卿 奥さんの扇ですつて？

ウキンドミヤ卿 さやう。これをごらん下さい！

ダーリントン卿 (ウキンドミヤの方へ歩みつつ) 僕は知らん。

ウキンドミヤ卿 知らない筈はありません。御説明がききたいのです。放してくれ、おい。(セシルに向つて言ふ)

ダーリントン卿 (傍白) さうすると此處へ、來てゐるんだな。

ウキンドミヤ卿 聽かして下さい。どうして妻の扇がここにあるのです？ 返事を下さい、どうあつ

ても、私はあなたの部屋を一々詮索せずには置かない。萬一妻があるようなものなら、私は——(動く)

ダーリントン卿 此の部屋を詮索することはなりません。あなたにそんなことをする権利がありませんか。斷じて許しません！

動いてゐるな。

(カーテンに突進する)

アーリン夫人 (右の後に登場) ウキンダミーヤさん。

ウキンダミーヤ卿 アーリンさん。

(皆一齊に立ち上りあたりを見廻す。ウキンダミーヤ夫人はカーテンの後より現はれ、室左よりこつそりぬけ出す)

アーリン夫人 どうも相済みません。今夜お宅をお暇する時、ついわたくしのだと思つて奥さんの扇を持つてまゐりました。ほんたうに済みませんでしたわねえ。

(ウキンダミーヤ卿から扇を受け取る、ウキンダミーヤ卿は輕蔑をもつてアーリン夫人を見る。ダ
ーリントン卿は愕いたり怒つたりする表情で立つてゐる。アウガスタス卿はわきへふりむく。人
人は互に顔を見合して笑ふ)

第四幕

場面 序幕に同じ。

ウキンダミーヤ夫人 (ソープアによりながら) どうして夫に話されよう。とても話せはしない。死ぬやうな思ひだ。わたくしがあの怖ろしい部屋から逃げて來た後で、どんな事がもち上つたことやら。ひよつとするとアーリンさんは、あそこへ行つたわけを皆に包まず打ち明けはしなかつたかしら。あの怖ろしい扇の本當のわけを打ち明けはしなかつたかしら。ああ、そのわけがしれようものなら二度と夫に顔向けが出來ようか。夫は決して許しはすまい。(ベルにふれる) ふだんわたくし達は誘惑や、罪悪や、過失から遠くかけ離れて安穩に暮してゐると思つてゐる。處が不意にこんな羽目になつてしまふ。まあ、人の生活は恐ろしいものだ。生活がわたくし達を支配してゐるのだ。わたくし達が生活を支配してゐると思つたら大間違ひだ。

(ローザリー右に登場)

ローザリー 奥様お呼びなさいましたか。

ウキンダミーヤ夫人 ああ、殿様はゆうべ何時頃おかへり遊ばしたか、お前知らないかい?

ローザリー 五時まではお歸りはございませんでした。

ウキンダミーヤ夫人 五時? 殿様は今朝ほどわたくしの部屋をお叩きなさらなかつたかい?

ローザリー さやうでございます。——九時半にお出でなさいました。奥様はまだお目覺めなさいませんと申し上げて置きました。

ウキンダミーヤ夫人 何とかおつしやりはしなくなつて?

ローザリー 奥様の扇のことを何やらおつしやつていらつしやいましたが、わたくしにはよくわかりかねました。扇がおなくなりになつたのでございませうか。わたくしも探して見ましたが見つかりませんでした。それからパーカーさんも、どのお部屋にもないと申します。彼の人はお部屋を一つ残らず捜して、見晴しまでもたづねたのでございます。

ウキンドグミーヤ夫人 いえ、いいのよ。パーカーにも心配しないやうに、さうお云ひ。いいんだから。

(ローザリー退場)

ウキンドグミーヤ夫人 (立ち上りつつ) あの人はきつと夫に話すに違ひない。わたくしには目に見えるやうだ——他人のために身を犠牲にする不思議な行動を、やすやすと、無考へに、さうして美事にやつてのけはしたものの、あとでは随分高いものについたと心づく人間が、目に見るやうに想像される。どうしてあの女が、自分の身の破滅か、わたくしの身の破滅か、などと迷ふ筈はなからうに、何と云ふ不思議なことだらう。わたくしはあの女を人前で構はず恥しめようとした。それだのにあの女はわたくしの身をかばつて、わたくしの身代りに人前で恥をかいてくれた。世間の物事と云ふものは皮肉なものだわ。いい婦人とか悪い婦人とか云つてゐる言葉の中にだつても苦い皮肉があつたのだわ。まあ、何といふ教訓だらう。もう役に立たなくなつた時に、やつとその教訓がわかつて来るなんて、まあ人生といふものは何と云ふ苦しいものなのだらう。もしやあの女が昨夜のことを話さないならわたくしが云はなけりやならない。まあ、それにしたつて恥かしい、恥かしい。その話をするのはあの時の

思ひをもう一度すつかり繰り返すことなのだ。行ひが人生の第一の悲劇なら、言葉はその次の悲劇だ。いや恐らくは最も悪い悲劇なのだ。言葉は本當に無慈悲なものだ……おお！(ウキンドグミーヤ卿がはひつて来たので吃驚する)

ウキンドグミーヤ卿 (接吻する) マーガレット、何と云ふ顔色だい！

ウキンドグミーヤ夫人 よく眠れなかつたものですか。

ウキンドグミーヤ卿 (妻と一緒にソファへ坐り) そりや濟まなかつた。大變遅く歸つたものだから、

お前を起すのはやめにしたのだ。お前泣いてゐるね。

ウキンドグミーヤ夫人 ええ、泣いてゐます。あなた、お話ししたいことがございますの。

ウキンドグミーヤ卿 ねえお前、お前は気分がよくないのだよ。あまり氣を使ひ過ぎるからだ、田舎へ行くかうぢやないか。セルビーへ行けば病氣なんかすぐ癒つてしまふ。もうロンドンの季節はあらかたおしまひだ。かうしてゐるのも無駄なことだ。ねえ、お前、なんなら今日にも立たうぢやないか。(立ち上る) 三時四十分の汽車なら、樂に間に合ふよ、フアンネルへ電報を打つて置かう。(室を横ぎつてテーブルにつき電報を書く)

ウキンドグミーヤ夫人 ええ、今日まゐりませう。いえ、今日は駄目でございますの、あなた。立つまへに是非お目にかからなければならぬかたがございませう——わたくしに親切にしてくださいませう。

ウキンドミーマ卿 (立上つてテーブルを離れソファにもたれる) お前に親切にしてくれたつて？
 ウキンドミーマ夫人 それどころか、もつと、もつと(立ち上つて夫のそばへ行く) お話しますがね、
 あなた——ですが、どうぞ、わたくしを愛してください。愛してください。あなたが今まで愛してく
 ださつたやうに。

ウキンドミーマ卿 愛して下さつたやうにだつて？ お前は昨夜此處へ来たあの穢らしい女のことを
 考へてゐるんだらう？(ぶらぶら室を歩いて、妻が坐つてゐる右へ坐る) お前はまだ妙にかんぐつて
 ゐるんだね。いやそんな筈はない。

ウキンドミーマ夫人 かんぐつてなんか居りませんわ。わたくしが悪うございました。馬鹿でございま
 した。今となつてやつとそれに気がついたのでございます。

ウキンドミーマ卿 昨夜お前があつた女を招待したのは大變いいことだつたけれど、もう二度と、あの女
 に逢つてはならんよ。

ウキンドミーマ夫人 何故そんなことをおつしやいますの？(間)

94
 ウキンドミーマ卿 (妻の手をとつて) マーガレット、私はアーリン夫人は自分で罪を犯したのではな
 くつて、人からひどい目に逢はされた不幸な女だと思つてゐた。どうかして善良な人間にならう、一
 時の過失から墮落してしまつたが、どうかしてもとの身分に歸らう、もう一度正しい生活を送らうと
 思つてゐるのだと私は考へた。私はあの女の云ふ事を信じてゐた——私はとんだ思ひ違ひをした、あ

の女は女としては精一杯なれるだけの悪黨だ。

ウキンドミーマ夫人 アーサー、女のことをさうひどくおつしやるものではありませんよ。わたくしに
 は今では、人間は二つの別口の人種か、或は別の生き物でもあるやうに、かつきりと區別出来るも
 のだとは思はれません。いい女と云はれてゐる人間にも恐ろしいことが、いはば捨鉢な心持や、剛情
 や、嫉妬や、罪惡がひそんで居ります。しかし、悪い女とは云はれても、その人達にも悲しみや、悔
 みや、憫れみや、犠牲の心が隠れてゐます。わたくしはアーリンさんを悪い女とは思ひません。わた
 くしは斷じてさうは思ひません。

ウキンドミーマ卿 ねえお前、あの女はもう駄目だ。あの女が私達に對してどんな悪いことを巧らんで
 るやうと、そりやどうだつて構はない。だがお前は二度と再びあの女に逢ふのぢやないよ。あれは許
 し難い女だ。

(間)

ウキンドミーマ夫人 わたくしはあの方に逢ひます。あの方にここへ来て貰はうと思ひます。
 ウキンドミーマ卿 斷じてなりません。

ウキンドミーマ夫人 あのかたは、いちどはあなたの(強く)お客様として此處へお出ででした。今度
 はわたくしの(強く)お客様としてお出でにならなければなりません。それで五分五分ではありませ
 んか。

ウキンドグミーヤ卿 あの女は此處へ来てはならないのだ。

ウキンドグミーヤ夫人 (立ち上り) もう遅うございます。いまさらそんなことをおつしやつても。(室を歩く)

ウキンドグミーヤ卿 (立ち上り) マーガレット、ゆうべ此處から歸つて、あの女は何處へ行つたか、それをお前が知らうものなら、お前はあの女と同席しようとはしないだらう。實に沙汰の限り、見下げ果てた女だ。

ウキンドグミーヤ夫人 あなた、わたくしはもう隠してはゐられません。すつかり打ち明けてしまひます。わたくしはゆうべねえ――

(パーカー、名刺と扇をのせた盆を捧げて登場)

パーカー アーリン夫人が昨夜間違つてお持ち歸りの扇をお返しにお出でなさいました。お名刺に御用向きが書いてございます。

ウキンドグミーヤ夫人 まあ! どうぞお出でくださいと申し上げておくれ。(名刺を讀む) ようこそお出でくださつたと申し上げておくれ。あの方はわざわざお出でくださつたのですよ。(パーカー退場) アーサー。

ウキンドグミーヤ卿 (名刺をとつてそれをみつめて) マーガレット、逢はないでおくれ、とにかくまあ私に先づ逢はせておくれ。ほんたうにゆだんのならぬ女だ。お前は自分で自分のしてゐることがわか

らないのだ。

ウキンドグミーヤ夫人 わたくしはあの方に逢ふのが正當でございます。

ウキンドグミーヤ卿 お前は非常な憂き目の瀬戸際に來てゐるのだ。そんなあぶない處へ近よつてはなりません。お前より先に私が逢はなければなりません。

ウキンドグミーヤ夫人 何故でございますう。

パーカー (再び登場) アーリン夫人。

(アーリン夫人登場。パーカー退場)

アーリン夫人 御機嫌よう。奥さん。(ウキンドグミーヤ卿に向ひ) 御機嫌よう。扇のことはまことに済みませんでしたわねえ。何だつてあんな馬鹿な間違ひをしてかしたのでせう。わたくし、馬鹿ですわね。丁度お宅の方へ参り合せたものですから、お目にかかつて、扇をお返してよくお詫びをしようと思ひ存じましてね。それからよくお別れをしたとも存じまして。

ウキンドグミーヤ夫人 (アーリン夫人と一緒にソファの方へ行き、一緒に坐る) さやうなら。ではお出かけになりますの? アーリンさん。

アーリン夫人 え、わたくしはまた外國へ行つて住むつもりでございます。英國の氣候はわたくしにはあひません。わたくしは心臓を傷めたのです。それで氣に入らないと申すのです。南國で暮したうございますわ。ロンドンには霧が多いのと、堅苦しい人達が多いので困りますわ。ウキイダグミーヤさん、

霧が堅苦しい人達を生んだのか、それとも堅苦しい人が霧を生んだのか、何しろ霧や堅苦しい人達がわたくしをいららせませすの。だからわたくしは今日の午後、遊覧列車で旅をするつもりなのです。ウキンドミヤ夫人 今日午後ですつて？ わたくしは大變あなたにお目にかかりたかつたのでございます。

アーリン夫人 まあ御親切に！ ですがもうお暇しなければなりません。

ウキンドミヤ夫人 またお目にかかることは出来ないでせうか？ アーリンさん。

アーリン夫人 もうお目にかかれなれないと思ひます。わたくし達の生涯は遠方へかけ離れてゐます。ですが一寸お願ひしたい事がございます。どうぞ奥さんお寫眞を一枚頂かせて下さいませんか？ 頂戴が出来ればどんなに嬉しいでございませう。

ウキンドミヤ夫人 さあ、どうぞ、あのテーブルの上に一枚ございますわ、ごらんに入れませうね。

(テーブルの方へ行く)

ウキンドミヤ夫人 (アーリン夫人の傍へ来て小聲で話す) 昨夜あんな事をして置きながら、よくづうづうしくやつて來られなもんですね。

アーリン夫人 (面白さうに笑ひながら) ウキンドミヤさん、意見をおつしやる前に行儀作法を御注意遊ばせ。

ウキンドミヤ夫人 (もとの處へ來て) お世辭を云つていらつしやるのでせう。わざと差し上げるほ

ど綺麗ちやございません。(寫眞を見せる)

アーリン夫人 どういたしましたして、ずつとお美しうございます。ですが坊ちゃんと一緒にお寫しになつたのはございませんか。

ウキンドミヤ夫人 ございますわ。それがよろしうございますの？

アーリン夫人 さやうでございませす。

ウキンドミヤ夫人 ちよつとお待ちくださいまし。二階の部屋にございますから、持つてまゐりますわ。

アーリン夫人 お手敷をかけて相濟みません。

ウキンドミヤ夫人 (扉右へ行く) どう致しまして、ちつともそんなことはございません。

アーリン夫人 ありがたうございます。(ウキンドミヤ夫人右より退場。アーリン夫人ウキンドミヤ卿に向ひ) あなた今朝は少々御機嫌がお悪いやうね。ウキンドミヤさん、どうしたわけなの、マーガレットとわたくしとは大變仲よしになつて行くのに。

ウキンドミヤ卿 私は妻とあなたを同席させるわけには行きません。それにあなたは私に本當の事を云はないのですからね。アーリンさん。

アーリン夫人 本當のことはあの子にだつて申しはしません。

ウキンドミヤ卿 (中に立ち) 本當の事を話していただきたかつたと、時折思ひますよ。さうしたら

此の六箇月と云ふ間の不幸や、心配や、苦悶にも逢はずにゐられたらうと思ふのです。死んだとばかり思ひ込ませられてゐた母親が、現在生きてゐて、しかも悪いことをして離婚されて来た女だ。變名して人を惱ませて歩く悪い女だ。——それを私は今知つたのだが、——その悪い女があれの生みの母親であると思はせる程なら、あなたのお望み通りどれだけでもあなたに金を出して上げよう。贅澤三昧でもさせて上げようと思つたのです。結局昨日のやうなことになる爲にそんな眞似をしてゐたのです。私は初めて妻と争ひをしたのです。私にはどんなにそれが辛いことか、あなたにはよくお分りがないのだ。どうしてあなたにそれがわからう。あれの可愛らしい唇から初めて聞いた激しい言葉も、もとはと言へばあなたのおかげです。もうあなたとあれとは同席させるさへ忌まはしいのです。あなたはあれの無邪氣なところを滅茶滅茶にしてしまつた。(左、中に進む) たとひ、どんな不身持があつたにしろあなたと云ふ方は、正直な眞實な人だとばかり私は思ひ込んでゐました。しかし、さうではなかつたのです。

アーリン夫人 何だつてあなたはそんな事をおつしやるの？

ウキンドミヤ卿 あなたは私に強ひて招待状を書かせて、私の妻の宴會に來られた。

アーリン夫人 わたくしの娘の宴會にねえ。

ウキンドミヤ卿 あなたは宴會に來られた。宅から歸つて、ものの一時間とはたたないうちに、あなたは或る男の家に居つて居られた。さうして皆の前でいい恥をかいたのですね。(舞臺の面前、中へ行

く)

アーリン夫人 さうですよ。

ウキンドミヤ卿 (彼女の方を向かへり) ですから私にはあなたを、見下げ果てた不埒な女として卑しめる権利があるのです。私にはあなたに二度とこの家へ足を入れて下さるなといふ権利があります。妻の傍へ來ようなどと思つて下さるなと云ふ権利があります——

アーリン夫人 (冷やかに) わたくしの娘のどこなんでせうね？

ウキンドミヤ卿 あなたはあれを自分の娘などと呼ぶ権利はありません。あなたはあれがまだほんの子供の時分、自分の戀人の爲に、あれを見捨ててしまつたのです。さうしてあなたもその戀人から見捨てられたのでした。

アーリン夫人 (立ち上り) あなたはそれをわたくしの戀人の名譽になさるおつもり、それともわたくしの名譽になさるおつもりなのですか。

ウキンドミヤ卿 あなたの戀人の方の名譽にしませうよ。もうあなたと云ふものがそれほどよく分つて來たからには。

アーリン夫人 お氣をおつけなさいまし。もつとおつしみなさつたらいかげです。

ウキンドミヤ卿 言葉などに凝つてはゐられません。あなたと云ふものが、私にはよくわかつてゐるんですからね。

アーリン夫人 (ちつと彼を見つめながら) さあ、どうですかね。
 ウィンダミーヤ卿 よく分つて居りますとも。二十年間と云ふものは、あなたは一人で、暢気に暮して
 られた、子供のことなどは何とも思はずに暮してゐられた。或日あなたは新聞を見て、あなたの
 娘が金持の男と結婚したと云ふ事を知つた。其の時にふと悪い量見が起つたのです。あなたのやうな
 女があれの母であると云ふことをあれには知らせたくない。そんな恥かしいめに逢はせるくらゐなら、
 どんなことでも私は我慢するだらうと見てとつて、あなたは私のところへ來られたのです、さうして
 ゆすりを始めたのです。

アーリン夫人 (肩をそびやかす) ゆするなんてそんな穢い言葉はお使ひ遊ばすな。下等と云ふもので
 す。おつしやる通りわたくしは好い機会を掴みました。

ウィンダミーヤ卿 うん、あなたは好機会を掴んだ。しかしゆうべ悪い處を人に看破られて、その好機
 會を棒にふつたのです。

アーリン夫人 (意味ありげな笑ひをもつて) 仰せの通り、わたくしは好機会を棒にふりました。

ウィンダミーヤ卿 うちから妻の扇を間違へて持ち出したり、それをダールントンの部屋に置き忘れた
 りするなんて、本當に許し難いことです。私はもう扇を見るのもいやだ。あの扇はもう妻には使はせ
 ない。扇は穢れてしまつた。それはあなたのお手許に置くべきでした。お返し下さるには及ばないの
 です。

アーリン夫人 頂いてまゐりませう。(歩き行きつつ) 大變に綺麗ですから。(扇をとりあげて) マーガ
 レットに聞いてみませう。

ウィンダミーヤ卿 私は妻があなたに上げるといいと思ふ。

アーリン夫人 きつと一も二もなくくれますわ。

ウィンダミーヤ卿 それと一緒にあれが毎晩お祈りをする前に、接吻をする小さな畫像も上げてほしい
 ものだな。それはね、美しい黒い髪の無邪氣らしい娘の小さな畫像だが。

アーリン夫人 ああさうでした。忘れもしません。思ひ出せば古いことです。(ソファに腰かける) そ
 れはまだ結婚しない時のことでした。眞黒な髪の毛と無邪氣な表情が其の頃の流行でしたわ。ウィン
 ダミーヤ。

(間)

ウィンダミーヤ卿 どう云ふ譯です。今朝此處へ來られたのは、何の目的ですか? (左、中を横ぎつて
 坐る)

アーリン夫人 (聲に反語の調子を帯びて) わたくしの可愛い娘に別れを告げにまゐつたのです、勿論
 (ウィンダミーヤ卿怒つて下唇をかむ。アーリン夫人は彼を見つめる。さうして彼女の聲と様子とが
 眞面目になる。彼女の語調は深い悲しみの調子を帯びてゐる。しばしの間本性を見せる) ああ! わ
 たくしはあの子を相手に芝居染みた愁歎を見せたり、あの子にわたくしの身の上を話してあの子にと

り縫つて泣いたり、そんな馬鹿らしい狂言をやつてみようなどと思つてゐるのではありませんわ。わたくしには母の眞似をしようなどといふ考へはございません。生涯にたつた一遍わたくしは母親の心持と云ふものを経験しました。それはゆうべのことでございます。ほんたうに恐ろしいございました——苦しいございました。それはそれは苦しいございました。あなたのおつしやつた通り、二十年の間、わたくしは子供なして暮した——わたくしは今でも子供なして暮したい。(自分の感情を淺はかな笑ひに紛らして)それにねえ、ウキンダミーヤさん、もうすつかり大人になつた娘にどうしてわたくしが母らしい仕打が出来ませう。マーガレットは今二十一になります。わたくしはいつでも二十九より餘計には申しません、精々まあ三十くらゐの處です。石竹色の着物を着た時が二十九、でない時は三十と申します、ですからともわたくしはあれのお母さんには、なれさうもございませんわ。奥様がどんな幻を持つていらつしやうと、わたくしの知つた事ではありません。あなたの奥様は死んだ純潔な母親の思ひ出を、大切にしていraftしやればよろしいのです。自分の幻を持ち續けて行くだけでさへ、なかなかなまやさしいことではありませんのよ。わたくしはゆうべその幻を見失つてしまひました。わたくしには情愛といふものはないのだと思つて居りましたのに、わたくしにも情愛と云ふものがあつたのでございます。さうしてそんな心持はわたくしにはちつとも似合はないことがわかりましたのよ、ウキンダミーヤ、どうせそんなものは近代の衣裳とは釣り合ひは致しません。情愛を持つてゐる人は老けてみえますよ。(小さな鏡をテーブルから取り出して見る)なまじつか情愛を知つてゐると大事な瀬戸際で人の一生を臺なしにしてしまひます。

ウキンダミーヤ卿 あなたは恐ろしい人間です、本當に恐ろしい人間です。

アーリン夫人(立ちながら)あなたはわたくしに修道院へ行つて尼になるか、病院の看護婦にでもなつて欲しいのでせう、近頃のくだらない小説に出て来る人物のやうにね。あなたは本當に馬鹿ですね、實際の生活ではわたくし達はそんな眞似は致しません。兎に角見てくれのいいうちはそんな眞似はしませんよ。今時悔悛をしたつてそれが何の氣休めになります。ただ快樂あるのみですわ、悔悛なんてすつかり時代後れになつてしまひました。本當に女が悔悛するのなら下手な仕立屋に行けばいいんですよ。さもなければ誰だつて本當にはしませんわ。どんなことがあつたつてわたくしにはそんな眞似は出来ません。いいえ、わたくしはあなた方とは全く縁のない人間になつてしまふつもりです。此方へ參つたのがそもそも間違ひでした。わたくしは昨夜そのことに心附いたのでした。

ウキンダミーヤ卿 宿命のやうな怖ろしい間違ひでした。

アーリン夫人 (笑ひながら)殆ど宿命のやうね。

ウキンダミーヤ卿 直ぐとあの時、一部始終を妻に打ち明けなくて残念な事をしたと思ふ。

アーリン夫人 わたくしは自分の悪いやり方を悔んでゐますわ。あなたは善いやり方を悔んでいらつしやるのね。それがわたくし達の相違です。

です、私の口から。それは無限の苦痛のもととなるでせう。妻は非常にいやしめられたと思ふでせう。だが當然それを知るべきです。

アーリン夫人 お話しなさらうと云ふのですね。

ウキンダミーヤ卿 話すつもりです。

アーリン夫人 (ウキンダミーヤの傍へよつて) もしあなたがあれにその事を打明けてもしたら、わたくしはわざと自分の名を穢してあの子を一生立つ瀬のない人間にしてやりますよ。あの子の身の破滅になるのです。さうしてあの子を不幸にするのですよ。それでもあなたはたつて話さうとなさるんなら、わたくしは出来るだけ墮落をします。出来るだけ辱しめを受けます。話してはなりません。断じてならないのです。

ウキンダミーヤ卿 何故?

アーリン夫人 (間を置いて) わたくしがあの子の事を心配してゐる。愛してゐると申しましたら、あなたはわたくしをお笑ひなさいませうでせうね。

ウキンダミーヤ卿 私にはほんたうにさうとは思はれないのです。母の愛と云ふものは、獻身的な、博愛的な、犠牲的なものです。どうしてあなたにそのやうな事がわかるものですか。

アーリン夫人 ごもつともでございます。わたくしにどうしてそのやうな事がわかりませう。もうその話は止めにしてさうございませぬか——わたくしの身の上を娘に打ち明ける事だけは、たつておこ

とわり申します。それはわたくしの秘密でございます。あなたの秘密ではございません。もしわたくしはその事をあの子に話さうと決心をすれば、また話さうと思へばお暇をする前に娘に打ち明けてしまひます。さうでない限りはわたくしは決して話しは致しません。

ウキンダミーヤ卿 (腹立たしげに) そんなら、すぐにここをお立ち下さるやうに願ひ申します。マーガレットには私から言譯けをして置ませう。

(ウキンダミーヤ夫人右に登場。手に寫眞をもつてアーリン夫人の處へ行く。ウキンダミーヤ卿はソファの後へ行つて、場面が進んで行く間、氣づかはしげにアーリン夫人を見守つてゐる) ウキンダミーヤ夫人 アーリンさん、お待たせてして失禮いたしました。寫眞が何處へ行つてしまつたか見つかりませんでした。でもたうとう主人の化粧部屋にございましたわ——主人がとつてしまつたのでございますわ。

アーリン夫人 (寫眞を受取つてそれを見る) ほんたうに可愛らしうございますこと——思つてゐた通りでございますわ。(ウキンダミーヤ夫人と共に、ソファに行つて彼女と並んで腰をかけ、再び寫眞を見つめる) これがあなたの赤ちやんでいらつしやいますのね! 何と云ふお名前ですの?

ウキンダミーヤ夫人 父の名前をとりまして、ジェラードと申しますの。

アーリン夫人 (寫眞を下に置きながら) ほんたうに?

ウキンダミーヤ夫人 ええ、女の子でしたら、母親の名前をつけるのでしたけれど。わたくしの母はや

はりわたくしと同じにマーガレットと申しますの。

アーリン夫人 わたくしの名前もマーガレットと申しますの。

ウキンダミーヤ夫人 まあ！ほんたうに？

アーリン夫人 ええ（間）奥さん、あなたはお亡くなりになつたお母様をお慕ひ遊ばして、それで、さう云ふ名前をおつけなさいましたのね。わたくしウキンダミーヤさんから伺ひましたわ。

ウキンダミーヤ夫人 わたくしたちはみんな理想と云ふものを持つてくらしてゐるのですわ。すくなくとも、理想を持つてゐるのがあたりまへでございますわ。さうしてわたくしの理想は母親なのでございます。

アーリン夫人 理想といふものは危険な物でございますわ。理想よりも現實の方がようございます。現實はつらいものですけれど、それでも理想よりはましてございますわ。

ウキンダミーヤ夫人（首を振りながら）もし自分の理想を失へばわたくしはすべてのものを失つてしまひますわ。

アーリン夫人 すべてのものを？

ウキンダミーヤ夫人 ええ。

アーリン夫人 あなたのお父様は、時々あなたにお母様の事をお話しになりました？

ウキンダミーヤ夫人 いいえ。それを話すのが、父には非常に苦痛でございましたの。父は母親が、わ

たくしの生れる二三箇月前になくなりました時のやうすを、話してくれた事がございました。父は話をしながら、目に一杯涙を溜めて居りました。さうして、もうどうぞ母の名前を云つてくれるなど申しました。それを聞くのさへたへられなかつたのです。わたくしの父は——わたくしの父は實際失戀の爲に死んだのでございますわ。父の一生はほんたうに荒んだ一生でございましたわ。

アーリン夫人（立ち上る）では、もうこれで失禮いたしますわ。

ウキンダミーヤ夫人（立ち上る）まあ、ごゆつくりなすつて下さいまし。

アーリン夫人 いいえ、もうお暇しなければなりません。わたくしの馬車がもうきつと戻つて来たでございますませう。ジエツドバラア夫人の處まで手紙を持たせてやつたのですけれど。

ウキンダミーヤ夫人 アーサー。あなたアーリンさんの馬車が戻つて来たかどうか、聞いて来て下さいませんか。

アーリン夫人 どうぞ、そんな御心配には及びません。

ウキンダミーヤ夫人（夫に）でも、どうぞ聞いて来て下さいまし。

（ウキンダミーヤ卿ちよいと躊躇してアーリン夫人を見る。アーリン夫人知らん顔をしてゐる。

ウキンダミーヤ卿室を去る）

（アーリン夫人に）ああ、わたくしはあなたに何と申し上げてよいやら。あなたはゆうべわたくしを救つて下さいました！（彼女の傍へ行く）

アーリン夫人　もし！　もうそんな事はおつしやいますな！
ウキンドミーヤ夫人　いいえ、申さなければなりません。わたくしはあなたを犠牲にさせて、平氣であるわけにはまありませんわ。そんなことはわたくしには出来ませんわ。それぢや、あんまりお氣の毒でございます。わたくしはなにもかも夫にはなしてしまひます。それがわたくしの義務でございますわ。

アーリン夫人　いいえ、それはあなたの義務ではございません！　あなたはすくなくとも、ほかの人にしなければならぬ義務がございます。あなたは、わたくしに恩があるとおつしやつたではありませんか？

ウキンドミーヤ夫人　わたくしはあなたに、何から何まで御恩になつて居りますわ。

アーリン夫人　そんならその恩返しに、どうぞ何事も黙つてゐて下さいまし。それより他に恩返しのはありませんわ。わたくしが一生に一度、たつた一つの陰徳をいたしましたのに、それを人に知られてしまつては、臺なしになつてしまひますわ。ゆうべの事は、お互の胸にをさめて、必ず祕密にして置く事を、お約束をなすつて下さいまし。あなたは夫の生活に不幸を持ち込んではいけません。そんな事をして夫の愛情を傷つける必要が何處にございませう。あなたは決してそれを傷つけてはなりません。それでなくても愛情は亡び易いものなのでございます。ほんたうに、愛情ぐらゐる亡び易いものはございませんわ！　どうぞ決して御主人にお話しなされないやうにお誓ひなすつて下さいまし。是

非さうお願いいたしますわ。

ウキンドミーヤ夫人　（頭を下げながら）それはあなたのお考へでございませうけれど、わたくしはさうは思ひませんの。

アーリン夫人　ええ、わたくしの考へでございませう。さうしてあなたは決してあなたのお子さんの事をお忘れになつてはいけませんよ——わたくしはあなたをあのお子さんの母親として考へてみたうございますの。どうぞ御自分でも母親だといふ事をお考へなすつて下さいまし。

ウキンドミーヤ夫人　（見上げながら）これから何時もさう云ふ考へで居りますわ。わたくしはたつた一度母親の事を忘れた事がございました。——それは昨夜でございました。ああ、もしもわたくしが母親の事さへ忘れなかつたら、あんな愚かな、あんな間違つた事はいたしませんでしたのに。

アーリン夫人　（身をふるはせて）もし！　昨夜はもうとうに過ぎ去つたのでございます。

（ウキンドミーヤ卿登場）

ウキンドミーヤ卿　アーリンさん、あなたの馬車はまだ戻つてまありません。

アーリン夫人　御心配には及びませんわ。辻馬車を雇つてまありますから。何だつてシユルスベリー侯爵のやうな立派なものはないんですからね。では奥さん、これでほんたうにお暇をいたします。さやうなら（中に行く）どうぞわたくしをお忘れなさいませう。さぞまあわたくしを變な女だと思召しませうね。さう云へばわたくしはこの扇が大變氣に入つてしまひましたの。ばかに氣に入つたものです

から、ゆうべ舞踏會の時にこれを持ち出してしまつたのです。さうしてあなたはわたくしにこれを下さいませうか？ きつと下さるだらうつて、ウキンダミーヤさんがおつしやいましたわ。あれはあの方のプレゼントなんでございますつてね？

ウキンダミーヤ夫人 お氣に召しましたらどうぞお持ち下さいまし。でもその扇子にはわたくしの名前がございませう。マーガレットと書いてございませう。

アーリン夫人 でもわたくし達は名が同じでございませうもの。

ウキンダミーヤ夫人 ああ、さうでございましたわね。名前が同じだなんて何と云ふ不思議のお縁でございませう！

アーリン夫人 全く不思議でございませう。ありがたうございませう。——これをあなたのお形見に致しますわ。(握手する)

(パーカー登場)

パーカー アウガスタス・ロートン閣下がおいででございませう。アーリン夫人のお馬車がまゐりました。

(アウガスタス登場)

アウガスタス卿 やあ君、おはやう。奥さんおはやうございませう。(アーリン夫人を見て)アーリンさん！

112 アーリン夫人 アウガスタスさん、おはやうございませう。御機嫌よろしうございませうか？

アウガスタス卿 (冷淡に) ええ、ありがたう。

アーリン夫人 でもお顔色があんまりよろしうございませぬね。あなたは夜更しをなさいましたね。毒でございませうよ。ほんたうにもつと體をお大切になさいまし。ではさやうなら。ウキンダミーヤさん。(アウガスタスにお辭儀をして、戸口の方へ行く。急ににこにこして、アウガスタスを振り返りながら)アウガスタスさん、わたくしを馬車まで見送つて下さいませぬか。あなたは扇を持つて来て下さるでせうね。

ウキンダミーヤ卿 私が持つてまゐりませう。

アーリン夫人 いいえ、アウガスタスさんにお願ひ申します。わたくしは公爵夫人に特別な用事がございませう。アウガスタスさん扇を持つて行つて下さいませぬか。

アウガスタス卿 ほんたうにお望みなら持つてまゐりませう。

アーリン夫人 (笑ひながら) 勿論ほんたうでございませう。あなたはそれをきつとまゐく持つていらつしやるわ。あなたは何でもうまゐく持つていらつしやるわ。

(アーリン夫人は戸口に近附いた時に、一寸ふり返つてウキンダミーヤ夫人を見る。二人は目と目を見合はせる。それから夫人はぐるりと後を向いてアウガスタスを従へながら中より退場)

ウキンダミーヤ夫人 アーサー、あなたは決してアーリン夫人の事を二度と再び悪くおつしやらないでせうね？

ウキンダミーヤ卿 (おごそかに) あの婦人には思つたよりいい處がある。

ウキンダミーヤ夫人 あの方は、わたくしよりも善人ですわ。

ウキンダミーヤ卿 (微笑しながら彼女の頭を軽く叩いて) お前とあの女とは別の世界に住んでゐるのだ。お前の住んでゐる世界には悪い事は決してはひつて來ないのだよ。

ウキンダミーヤ夫人 そんなことをおつしやるものではございません。わたくし達にはたつた一つの世界があるばかりでございますわ。さうしてその世界には善も悪も、罪も、無邪氣も、手を取り合つて、進んで行くのでございます。身を安穩に過さうと思つて、浮世の半面に目を閉ぢてしまふのは、丁度目隠しをして峻しい坂を夢中に通らうとするのと同じ事でございますわ。

ウキンダミーヤ卿 (彼女と共に降りて來て) お前どうしてそんな事を云ふのだね?

ウキンダミーヤ夫人 (ソファに坐す) 何故つて、わたくしは世間を知らなかつた爲に、危い峠ふちへ連れて行かれましたの。さうしてわたくし達の中を割いたあの人が――

ウキンダミーヤ卿 私達は決して中をさかれやしなかつた。

114
ウキンダミーヤ夫人 わたくし達は決して二度と中をさかれやしませんわ。アーサー、どうぞわたくしを變らずに愛して下さいまし。わたくしはこれから尙更あなたを信じますわ。心底からあなたを信じますわ。二人してセルビイへ行かうぢやございませんか。セルビイのローズ・ガートンには薔薇が咲いて居りますわ。白いのやら紅いのやら。

(アウガスタス卿中に登場)

アウガスタス卿 アーサー、あの女は總ての事を説明してしまつた!

(ウキンダミーヤ夫人、この言葉に吃驚して蒼白になる。ウキンダミーヤ卿びつくりする。アウガスタス卿は、ウキンダミーヤ卿の腕を捕へて、舞臺の前方へ連れて來る)

ねえ君、あの女は厄介な事をすつかり説明してしまつたんだ。我々はみんな、あの女を非常に悪く誤解してゐたんだ。あの女がダーリントンの部屋へ行つたのは全く僕の爲だつた。實は僕に餘計な心配をさせまいと思つてね――最切にクラブを訪ねた處が、私が出かけて行つたと云ふ事を聞いたものだから――私の後を追ひかけて來たんだ――其處へ我々がはひつて來たので吃驚して――外の部屋へ逃げ込んだのだ――總ての事情は全くさうだつたのだ。それで僕も安心した。僕等は皆あの女を残酷に取り扱つてゐた。あの女は丁度僕に似合ひの女だ。僕にびつたり吻合してゐる。あの女の要求する條件はイギリス以外の土地に住まはうといふ事だけなのだ。それも頗る結構な事ぢやないか。イギリスと云ふ處は厄介なクラブに、厄介な氣候に、厄介な料理、すべて厄介なものだらけだ。全く當てられてしまふよ。

ウキンダミーヤ夫人 (吃驚して) ではアーリン夫人は――?

アウガスタス卿 (丁寧に辭儀をして彼女の方へ進みながら) 奥さん――私はアーリン夫人と結婚をする光榮を有したのでございます。

ウキンダミーヤ脚 さあ、君の結婚しようとしてゐられる方は大變利口な婦人なんだよ！
ウキンダミーヤ夫人 (夫の手をとりながら) ああ、あなたは本當にいいお方と結婚なさるんですわ！

—幕—



昭和七年十月十日發行
昭和七年九月二十五日印刷

世界名作文庫 一六

ウキンダミーヤ夫人の扇

定價金拾五錢

印 檢



翻譯者

谷崎潤一郎

發行者

和田利彦

印刷者

木呂子斗鬼次

印刷所

共同印刷株式會社

發行所

東京・日本橋・通三丁目
振替東京一六一七番

春陽堂

電話日本橋五一・六四一番

世界名作文庫總目錄

英國篇

13	嵐が丘 前篇	大和	近刊
12	戀愛双曲線 後篇	永松	近刊
11	戀愛双曲線 前篇	永松	近刊
10	シーザーとクレオパトラ	楠山	、二〇
9	デビッドの生立ち 4	矢口	近刊
8	デビッドの生立ち 3	矢口	近刊
7	デビッドの生立ち 2	矢口	近刊
6	デビッドの生立ち 1	矢口	近刊
5	深き淵よりの叫び	平田	近刊
4	革命婦人	内田	近刊
3	から騒ぎ	坪内	近刊
2	ましがひつゞき	坪内	、二〇
1	マクベス	坪内	近刊

15	嵐が丘 後篇	大和	近刊
14	カスターブリッジの市長	宮島	近刊

佛蘭西篇

114	「絶対」の探究	水野	近刊
113	放蕩親爺 前篇	永戸	近刊
112	放蕩親爺 後篇	永戸	近刊
111	アルマン	前川	近刊
110	赤と黒 1	佐々木	近刊
109	赤と黒 2	佐々木	近刊
108	赤と黒 3	佐々木	近刊
107	赤と黒 4	佐々木	近刊
106	ノートルダムの僂男 1	江間	近刊
105	ノートルダムの僂男 2	江間	近刊
104	ノートルダムの僂男 3	江間	近刊
103	サランボオ	生田	、四〇
102	ルゴン家の人々	吉江	近刊
101	カメルメン	生田	、二〇

129	吾等の心	高木	、三〇
128	小間使の日記 前篇	岡野	近刊
127	小間使の日記 後篇	岡野	近刊
126	エス・ボナールの罪	岡野	、二五
125	赤い百合合	石川	近刊
124	ジャンダルク	吉江	近刊
123	フランズ短篇集	森田	近刊
122	フイリツプ短篇集	堀口	、二〇
121	葡萄島の葡萄作り	岸田	近刊
120	ドルヂェ伯の舞踏會	堀口	近刊
119	悪魔が淵	田沼	近刊
118	新譯巖窟王 前篇	三上	近刊
117	新譯巖窟王 中篇	三上	近刊
116	新譯巖窟王 後篇	三上	近刊
115	クラール	佐々木	近刊

日本小説文庫目録

1	有 憂 華 菊 池 寛	定價送料 三五六
2	孤 島 の 鬼 江 戸 川 亂 歩	三〇六
3	關 ケ 原 直 木 三 十 五	三五六
4	闇 に 開 く 窓 里 見 淳	三五六
5	隠 亡 堀 國 枝 史 郎	二五六
6	さ ん ど 笠 子 母 澤 寛	二〇四
7	井 原 西 鶴 武 者 小 路 實 篤	一〇二
8	紅 蝙 蝠 前 篇 長 谷 川 伸	三〇六
9	紅 蝙 蝠 後 篇 長 谷 川 伸	三〇六
10	第 二 の 巖 窟 白 井 喬 二	一五四
11	淀 君 前 篇 三 上 於 菟 吉	三五六
12	淀 君 後 篇 三 上 於 菟 吉	三五六

13	半七捕物帳 1 岡本綺堂	一〇二
14	半七捕物帳 2 岡本綺堂	一〇二
15	星旗樓秘聞 木村 毅	二〇四
16	唐 人 お 吉 十一谷義三郎	一五四
17	時 ^{敗者} の 唐 人 お 吉 十一谷義三郎	三〇六
18	砂繪呪縛前篇 土師 清二	三五六
19	砂繪呪縛後篇 土師 清二	三五六
20	青 眉 前篇 久米 正雄	三〇六
21	青 眉 後篇 久米 正雄	二五六
22	澤村田之助前篇 矢田 挿雲	三〇六
23	澤村田之助後篇 矢田 挿雲	三〇六
24	新選組物語 子母澤 寛	一五四
25	陰 獸 江 戸 川 亂 歩	一〇二
26	愛 人 前篇 細田 民樹	三五六

321	革命家の思出 前篇	大 杉 榮 譯	二五
316	革命家の思出 後篇	大 杉 榮 譯	三〇
317	露西亞短篇集 1	森 鷗 外 譯	近 刊
318	露西亞短篇集 2	森 鷗 外 譯	近 刊
319	北極の記録	米 川 正 夫 譯	二〇
320	消されない月の話	米 川 正 夫 譯	二五
321	その前夜	米 川 正 夫 譯	近 刊

諸國篇

401	病院横丁の殺人犯	森 鷗 外 譯	一〇
402	ノ 幽 霊	森 鷗 外 譯	近 刊
403	幽 霊	森 鷗 外 譯	二五
404	ジョン・ガブリエル・ボルクマ	森 鷗 外 譯	近 刊
405	債 鬼 外四篇	森 鷗 外 譯	近 刊
406	死 の 勝 利	生 田 長 江 譯	四〇
407	二人畫工 外一篇	内 田 魯 庵 譯	近 刊
408	シヤングル 前篇	前 田 河 廣 一 郎 譯	二五
409	シヤングル 前篇	前 田 河 廣 一 郎 譯	二五
410	ス パ イ 前篇	早 坂 二 郎 譯	二五
411	ス パ イ 後篇	早 坂 二 郎 譯	二五
412	血 と 砂 前篇	永 田 寛 定 譯	近 刊
413	血 と 砂 後篇	永 田 寛 定 譯	近 刊

27	愛	人後篇	細田	民樹	三五六
28	錢形平次捕物控		野村	胡堂	二五六
29	虹の歌		長田	幹彦	三五六
30	右門捕物帖	1	佐々木	味津三	二五六
31	右門捕物帖	2	佐々木	味津三	二五六
32	右門捕物帖	3	佐々木	味津三	二五六
33	沈鐘と佳人		白井	喬二	一五四
34	笑の王国		佐々木	邦	三〇六
35	銀	河前篇	加藤	武雄	二五六
36	銀	河後篇	加藤	武雄	二五六
37	仇討五十三次		佐々木	味津三	二〇四
38	愛憎の彼方前篇		中村	武羅夫	三〇六
39	愛憎の彼方後篇		中村	武羅夫	三〇六
40	戀愛黑點前篇		正木	不如丘	三〇六
41	戀愛黑點後篇		正木	不如丘	二〇四
42	草に祈る		櫻井	忠温	一五四
43	女殺延命院		土師	清二	三〇六
44	戸並長八郎前篇		長谷川	伸	三〇六
45	戸並長八郎後篇		長谷川	伸	三〇六
46	南國太平記前篇		直木	三十五	三五六
47	南國太平記中篇		直木	三十五	三五六
48	南國太平記後篇		直木	三十五	三五六
49	清水の次郎長前篇		村松	梢風	三〇六
50	清水の次郎長後篇		村松	梢風	二五六
51	蛭川博士		大下	宇陀兒	三五六
52	盲目の目撃者		甲賀	三郎	二五六
53	菊一文		吉川	英治	三五六
54	右門捕物帖	4	佐々木	味津三	二五六

55	敵討雜記帳前篇		直木	三十五	二五六
56	敵討雜記帳後篇		直木	三十五	二〇四
57	蟲		江戸川	亂歩	二〇四
58	蜘蛛	男	江戸川	亂歩	三五六
59	太陽と隣人	前篇	十一谷	義三郎	三〇六
60	太陽と隣人	後篇	十一谷	義三郎	三〇六
61	浅草紅團		川端	康成	二〇四
62	人間飢饉		村松	梢風	三〇六
63	祖國は何處へ	1	白井	喬二	近刊
64	祖國は何處へ	2	白井	喬二	近刊
65	祖國は何處へ	3	白井	喬二	近刊
66	祖國は何處へ	4	白井	喬二	近刊
67	祖國は何處へ	5	白井	喬二	近刊
68	祖國は何處へ	6	白井	喬二	近刊
69	祖國は何處へ	7	白井	喬二	近刊
70	半七捕物帳	3	岡本	綺堂	一〇二
71	半七捕物帳	4	岡本	綺堂	一〇二
72	日本嬢(オホシ)	前篇	群司	次郎正	二五六
73	日本嬢(オホシ)	後篇	群司	次郎正	二五六
74	侍ニッポン		群司	次郎正	二五六
75	西南戦争前篇		平山	蘆江	三〇六
76	西南戦争後篇		平山	蘆江	三〇六
77	旗本退屈男前篇		佐々木	味津三	二〇四
78	旗本退屈男後篇		佐々木	味津三	二〇四
79	唐人	船	平山	蘆江	三五六
80	英五郎ふたり		子母澤	寛	二〇四
81	投げ節彌之		子母澤	寛	二〇四
82	逃げる旗本		子母澤	寛	二〇四

96	艶麗風土記後篇	小島政二郎	二五六
95	艶麗風土記前篇	小島政二郎	二五六
94	獵奇の果	江戸川亂歩	二五六
93	清河八郎後篇	三上於菟吉	三五六
92	清河八郎前篇	三上於菟吉	三五六
91	日輪後篇	三上於菟吉	三〇六
90	日輪前篇	三上於菟吉	三〇六
89	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
88	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
87	一寸法師	江戸川亂歩	二五六
86	黄金假面	江戸川亂歩	三〇六
85	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
84	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
83	島原美少年録	木村毅	二五六
97	神風時雨組	佐々木味津三	三〇六
98	白鬼	三上於菟吉	三五六
99	忠臣藏八景	本山荻舟	一五四
100	一刀流物語	本山荻舟	一五四
101	諸國捕物帳	額田六福	三五六
102	愛すればこそ	谷崎潤一郎	二〇四
103	痴人の愛	谷崎潤一郎	三五六
104	珠壺	龍膽寺雄	一五四
105	掌の上の悪魔	龍膽寺雄	一五四
106	續右門捕物帖1	佐々木美津三	二五六
107	續右門捕物帖2	佐々木美津三	二五六
108	朱面組傳奇前篇	下村悦夫	三五六
109	朱面組傳奇後篇	下村悦夫	三五六
110	相馬大作	額田六福	二五六

111	杳掛時次郎	長谷川伸	二〇四
112	險の母	長谷川伸	二五六
113	松平長七郎青春記	下村悦夫	近刊
114	風雲天満双紙	佐々木味津三	三五六
115	綺堂讀物集1	岡本綺堂	二五六
116	綺堂讀物集2	岡本綺堂	二五六
117	綺堂讀物集3	岡本綺堂	二五六
118	綺堂讀物集4	岡本綺堂	二五六
119	綺堂讀物集5	岡本綺堂	二五六
120	大地に立つ前篇	野村愛正	二〇四
121	大地に立つ後篇	野村愛正	二〇四
122	東洲齋寫樂	邦枝完二	二五六
123	饗宴前篇	加藤武雄	三〇六
124	饗宴後篇	加藤武雄	三〇六
125	天草美少年録	佐々木味津三	三五六
126	心理試験	江戸川亂歩	一五四
127	煙幕	櫻井忠温	三五六
128	東京行進曲	菊池寛	三〇六
129	半七捕物帳9	岡本綺堂	一〇二
130	半七捕物帳10	岡本綺堂	一〇二
131	半七捕物帳11	岡本綺堂	一〇二
132	いたづら小僧日記	佐々木邦	三〇六
133	青春行狀記前篇	直木三十五	三五六
134	青春行狀記後篇	直木三十五	三五六
135	お傳地獄	鈴木泉三郎	二〇四
136	恐怖の齒型	大下宇陀兒	三五六
137	決闘介添人	大下宇陀兒	二〇四
138	殺人鬼前篇	濱尾四郎	三〇六

152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139
 殺人 鬼後篇 濱尾 四郎 三〇六
 江戸城心中前篇 吉川 英治 三〇六
 江戸城心中後篇 吉川 英治 三〇六
 かんく蟲は唄ふ 吉川 英治 二五六
 鳩笛を吹く女 吉屋 信子 三〇六
 吉良家の人々 森田 草平 近刊
 接吻市場前篇 邦枝 完二 三〇六
 接吻市場後篇 邦枝 完二 三〇六
 女 祕 書 丸木 砂土 二五六
 緑衣の聖母前篇 長田 幹彦 三〇六
 緑衣の聖母後篇 長田 幹彦 三〇六
 安城家の兄弟前篇 里見 諄 三〇六
 安城家の兄弟中篇 里見 諄 三〇六
 安城家の兄弟後篇 里見 諄 三五六

166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153
 心驕れる女前篇 佐藤 春夫 二〇四
 心驕れる女後篇 佐藤 春夫 二〇四
 生きとし生けるもの 山本 有三 二五六
 螢 草前篇 久米 正雄 三〇六
 螢 草後篇 久米 正雄 三〇六
 由利 旗 江 岸田 國士 三五六
 新編乃木將軍 櫻井 忠温 二〇四
 銃 後 櫻井 忠温 三〇六
 近世俠客ばなし 子母澤 寛 近刊
 木曾路の鴉 子母澤 寛 二〇四
 支 那 前川 河廣一郎 二五六
 太陽のない街 徳 永 直 三〇六
 祇園小唄 1 長田 幹彦 二五六
 祇園小唄 2 長田 幹彦 二五六

186 185 184 183 182 181 180 173 172 171 170 169 168 167
 祇園小唄 3 長田 幹彦 二五六
 祇園小唄 4 長田 幹彦 近刊
 木賊の秋 正木 不如丘 二〇四
 荒野の祕密 甲賀 三郎 二〇四
 殺人狂想曲外二篇 水谷 準 二五六
 假面の輪舞外四篇 佐々木 俊郎 二〇四
 殺人曆外一篇 横溝 正史 二五六
 三 太 郎 正木 不如丘 三五六
 診療簿餘白 正木 不如丘 二五六
 愛は何所まで 寺尾 幸夫 近刊
 夫唱婦唱 寺尾 幸夫 二〇四
 どぜう地獄 岡本 一平 二五六
 刀をぬいて 岡本 一平 二〇四
 女可愛いや 和田 邦坊 近刊

196 95 94 187
 半 處 女丸木 砂土 二五六
 錢形平次捕物控 2 野村 胡堂 二五六
 死 染 血 染 直木 三十五 近刊
 無頼 三代子母澤 寛 近刊

春陽堂文庫既刊書目

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
金色夜叉	藤村詩集	新生第一卷	新生第二卷	それから	相互扶助論	河内山と直侍	三人吉三	村井長庵	倫敦塔・その他	三郎	草枕	土坊	虞美人	瀧口入道	
尾崎紅葉	島崎藤村	島崎藤村	島崎藤村	夏目漱石	大目漱石	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	長塚節	夏目漱石	夏目漱石	高山樗牛
五〇八〇	五〇六〇	三〇六〇	三〇六〇	三〇六〇	三〇六〇	三〇六五	三〇六五	三〇六五	二〇六〇	二〇六〇	二〇六五	二〇六五	二〇六五	二〇六〇	二〇四五

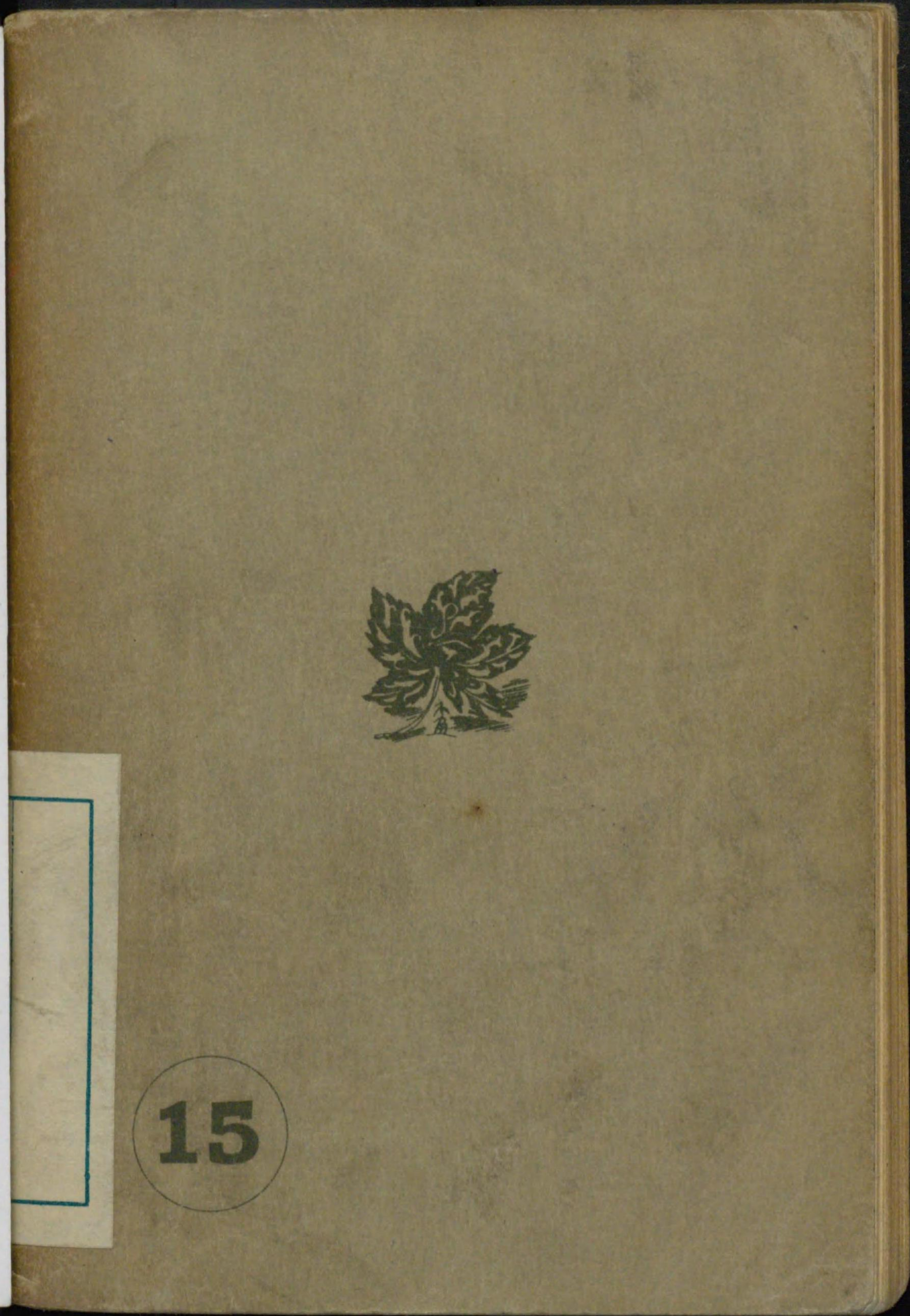
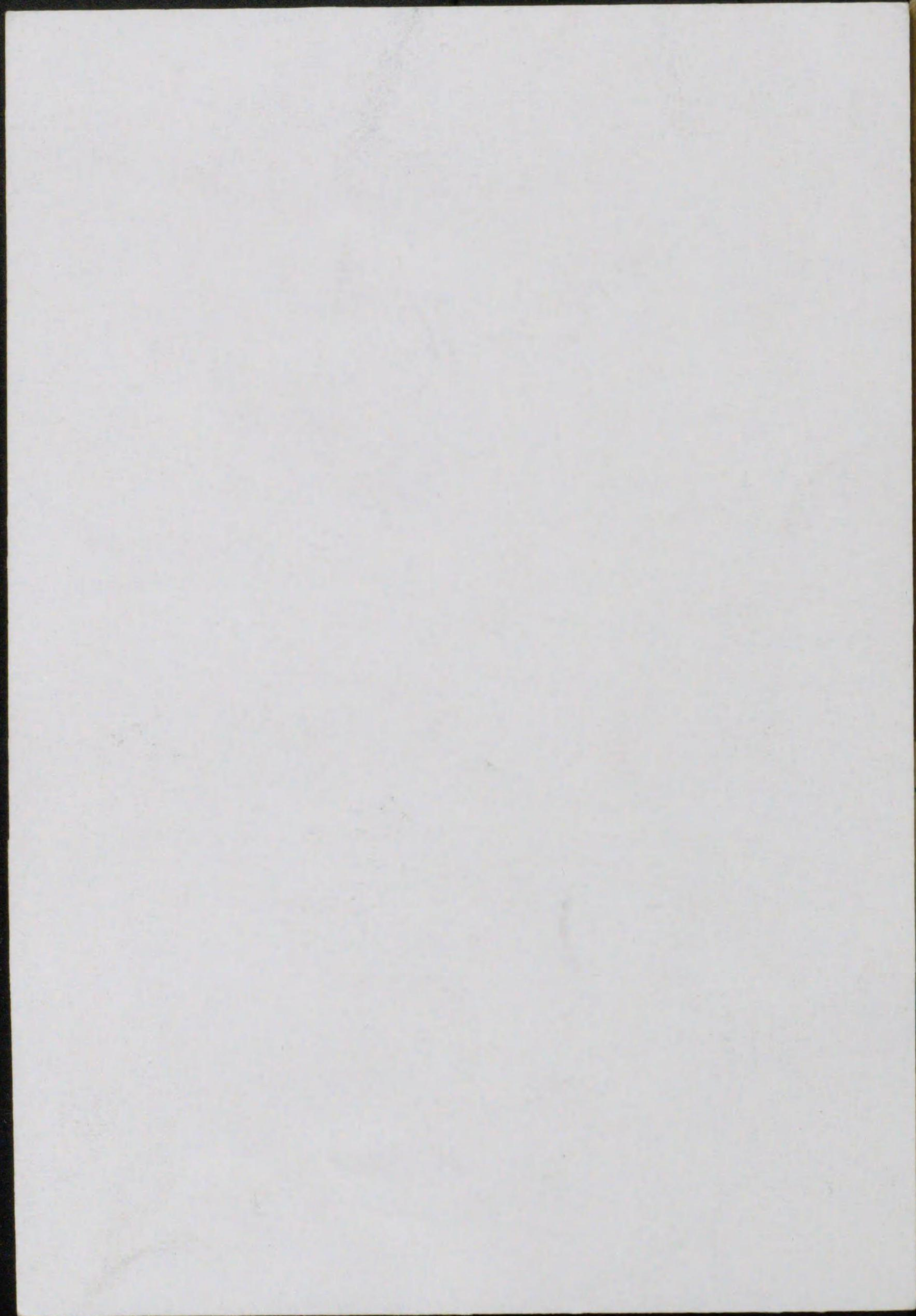
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
近代の小説	松蘿玉液	多情恨	丑 (まんじ)	春服	三人妻	嵐分	硝子戸の中	片戀外六篇	にこりえ	彼岸過迄	朝鮮	満韓とこゝろ	長塚節歌集	邪宗門	門葉狂言	照葉
田山花袋	正岡子規	尾崎紅葉	谷崎潤一郎	芥川龍之介	尾崎紅葉	島崎藤村	夏目漱石	二葉亭四迷	樋口一葉	夏目漱石	高濱虚子	夏目漱石	長塚節	芥川龍之介	夏目漱石	泉鏡花
三〇六〇	二〇六五	三〇六五	二〇四〇	三〇六五	三〇六五	二〇二〇	二〇二〇	三〇六〇	二〇四〇	三〇六五	三〇六〇	二〇四五	二〇八〇	二〇六〇	二〇六五	二〇四五

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
即興詩人	源義朝	北條霞亭	二人女・心の闇	田園の憂鬱	杳手鳥孤城落月	大いに笑ふ淀君	柿二つ	春泥	刺青外六篇	異邦人	泥人形外二篇	あらくれ	田舎教師	蓼喰ふ蟲	五重塔外二篇	史劇論
森山鷗外	田山花袋	森鷗外	尾崎紅葉	佐藤春夫	坪内逍遙	坪内逍遙	高濱虚子	久保田万太郎	谷崎潤一郎	島崎藤村	正宗白鳥	徳田秋聲	田山花袋	谷崎潤一郎	幸田露伴	坪内逍遙
四六五	四六〇	四六五	四四五	四四五	二〇四〇	二〇四〇	二〇六五	二〇四〇	二〇六〇	二〇六五	二〇六五	二〇六五	二〇六〇	二〇四〇	二〇四〇	二〇四〇

67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
太陽は草の香がする	饒太郎	新歸朝者日記抄	西遊日誌	義時の最期	名残の星月夜	牧の方面影	其面影	珊瑚集・附日和下駄	おかめ笹	捨てられる迄	水沫集下巻	水沫集上巻	多情佛心後篇	多情佛心前篇	不言不語	ふらんす物語
薄田泣菫	谷崎潤一郎	永井荷風	坪内逍遙	坪内逍遙	坪内逍遙	二葉亭四迷	永井荷風	永井荷風	谷崎潤一郎	森鷗外	森鷗外	里見	里見	尾崎紅葉	永井荷風	永井荷風
二〇六五	二〇四五	二〇四五	二〇四五	二〇四五	二〇二〇	近刊	二〇四五	二〇四五	二〇四五	二〇四五	三〇六五	三〇六五	近刊	三〇六五	二〇六五	未定

630
1

79	78	77	74	73	72	71	70	69	68
犀星	夢十	伽羅	生ける	坑風	野夫	思ひ出す人々	小説神髓	影燈籠	チロルの秋外三篇
室生犀星	夏目漱石	尾崎紅葉	河井醉茗	夏目漱石	夏目漱石	内田魯庵	坪内逍遙	芥川龍之介	岸田國士
	近	近	近	近	近	近	近	近	近
二六五	刊	刊	刊	六五	刊	刊	四五	四〇	四五



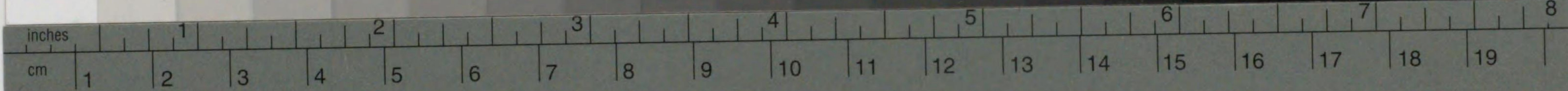
15

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

